

訴出ツベシ右日限過去訴出ルニ於テハ此度身代分散金ノ分配ニハ不差加者也

第三節 身代限ニ關スル諸種ノ處分方

〔第一〕 日切濟方ノ法ヲ廢ス 五年九月司法省第九号布達

凡ソ動産不動産取引ノ詞訟ヲ審判スルニ原告被告双方ノ内一方ノ者負公事ニ決スル時ハ日切濟方申付候上仍不相濟ニ於テハ身代限リ申付候方法ニ有之候處自今日切濟方ノ舊法ヲ廢シ一方ノ者負公事ニ相決シ直ニ濟方不相成時ハ身代限ノ方法ヲ執行可致候事

〔第二〕 父兄ト同居ノ子弟又ハ別居シテ財産ヲ異ニスル者ノ身代限處分方 五年九月十五号布告

父兄ト同居ノ子弟或ハ別居シテ財産ヲ異ニスルモノ又ハ父既ニ家督ヲ其子ニ讓リ隱居別宅シテ財産ヲ異ニスル者自今一己ニ金銀借受候分其證券中本家ノ戸主保証ノ調印無之上ハ貸主ニ於テ本家ノ財産ヲ目的トシ貸シ與フル筋無之候ニ付若シ右等ノ者共返金相滞訴訟ニ及ヒ候節同居ノ者ハ其身所持ノ物品ノミ分産異居ノ者ハ其財産ノミヲ以テ之ニ當テ身代限リニ裁判申渡候條爲心得此段相達候事

〔第三〕 身代限ノ處分ヲ受ケケル負債者ニ對スル定約期限未滿ノ貸金穀等處置方 六年七月第二号布告

負債者身代限ニ遇フ節其者へ貸金穀其他義務ヲ得可キ者定約期限未滿内ノ分處置振左ノ通

被定候條此旨相達候事

第一條 貸金穀又ハ義務ヲ得ベキ者定約期限未滿内ニハ訴出ルヲ許サ、ル規則ナレ其

負債者又ハ義務ヲ行フベキ者右期限未滿内ニ身代限ニ遇フ時ハ訴出ルヲ得ベシ

第二條 定約期限未滿内ニ訴出ル者ハ滿期後訴出ル者ト同一ノ權利ヲ有シ身代限財産糶賣

金ノ配分ヲ受ルヲ得ベシ

第三條 請人証人等連印ニテ本人返濟相滞ルニ於テハ引受返濟可致ノ明文有之証書ヲ取置

キタル者ハ本人身代限財産糶賣金ノ配分ヲ受ケ尙ホ不足アラハ滿期ノ時ニ至リ請人証人

ニ係リ之ヲ訴フルヲ得ベシ

第四條 身代限ニ遇フ者期限未滿内ノ者ニハ滿期ノ時ニ至リ返濟セント欲スルキハ別段請

人ヲ立テ請人ヨリ動不動産ヲ引當テ又ハ質物トナシ違變ナキヲ證明シテ原告人ノ承諾ヲ

求ムルヲ必要トス

第五條 負債者滿期ヲ保スル爲メ改メテ請人ヲ立テ請人ヨリ動不動産ヲ引當テ又ハ質物ト

爲シ違變ナキヲ證明シテ原告人之ヲ承諾スルキハ其原告人ハ此回ノ身代限財産糶賣金ノ

配分ヲ求ムルヲ得ヘカラス

第六條 定約期限未滿内ノ債主ハ身代限ニ遇フ負債主ニ對シ期限未滿内ニ訴フルモ滿期後

ニ訴フルモ其者ノ請願ニ任スト雖モ身代限ニ遇フ者ノ動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取置キ

タル債主ニ右動不動産ヲ身代限ノ糶賣ヲ爲スニ付已ノ請取ヘキ金高ヲ求ムルヲ得ヘキ
ノミヨテ糶賣ヲ爲スヲ拒ムヲ得ヘカラス

第七條 動不動産ヲ引當テ又ハ質物ニ取リタル者ハ其財産糶賣金ノ内ニテ金高又ハ利息ア
レハ利息ト共ニ其定約ノ證書ニ據リ處分ノ時迄ノ金高ヲ算計シ請取ヘキノ求メテ爲シ裁
判所ニ於テハ糶賣金配分ノ規則ニ從ヒ引當又ハ質物ヲ取置キタル者ニ配分スヘキ金高ヲ
引渡スヘシ

第八條 引當又ハ質物ヲ取置カザル金穀ノ債主定約期限未滿内ニ訴出ルルハ元金高又ハ利
息アレハ利息ト共ニ定約ノ證書ニ據リ處分ノ時迄ノ金高ヲ算計シ請取ヘキノ求メテ爲シ
裁判所ニ於テハ糶賣金配分ノ規則ニ從ヒ處分ヲ爲スヘシ

(第四) 負債主身代限處分ノ節他ニ貸附金穀ノ証文アルキノ處分方 七年九月司法省
金穀ヲ借リ返濟ヲ爲シ能ハサル者裁判所ノ處分ニ因リ身代限ニ遭ヒ候キ所有物ノ内他人へ
貸附置キタル金穀ノ証文之レアル節ノ取扱振明治五年壬申第四十號ヲ以テ相達置候處詮議
ノ次第有之左之通改正候條此旨相達候事

第一條 各裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ爲スニ當リ身代限ニ遭フ者ノ物件ノ内ニ身代限ニ
遭フ者ヨリ他人へ貸附置キタル金穀ノ証文有之キハ其証文ノ定約期限ノ滿未滿ヲ論セス
証文ニ記名シタル負債主ヨリ証文面ノ通り可受取旨身代限ニ遭フ者ノ債主へ申渡シ別紙

雜形ニ習ヒ証文ニ裏書ヲナシ其債主ニ相渡スヘキ

第二條 前條ノ場合ニ於テ債主其証文ヲ受取ルチ好マサルキハ其証文ハ身代限ニ遭フタル
者ニ所持致サセ置クヘキ

但定約滿期ノ証文ニテ負債主ノ家産些少ナルモ身代限ニ遭フ者ノ債主ニ於テ負債主ノ
身代限ヲ以テ現金ノ割賦ヲ請度旨申立ルニ於テハ望ノ通り處分スヘキ

第三條 債主數名ニシテ身代限ニ遭フ者ヨリ他人へ貸附ケ置タル金穀ノ証文一通又ハ數通
ナルキハ數名ノ債主ニ入札致サセ落札ノ金員ヲ以テ其落札シタル債主ト其他ノ債主トへ
金高ニ應シテ配當シ其落札ノ証文ニハ一通毎ニ第一條ノ方法ニ依リ處分スヘキ

但數名ノ債主盡ク入札チ不好キハ第二條ノ處分ニ及フヘキ

第四條 証文ヲ落札シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取リタルキハ其金員中
ヨリ己レノ受取ルヘキ金高ト之ヲ受取ルニ付テノ諸入費ノ金高トヲ引去リ其餘金ハ証文
ニ記載シアル債主ニ返シ而シテ計算チナシタル明細勘定書ト餘金ヲ返シタル受取書トチ
以テ裁判所ニ届ケ出ツヘキ

第五條 若シ證文ヲ落札シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取ラントスルニ證
文ニ記名シタル負債主モ亦身代限ニ遭ヒテ證文ニ記シタル金員ノ全部又ハ幾部チ返シ能
ハキルキハ証文ニ記名シタル負債主ヨリノ證文ヲ落札シタル債主ニ對シ右ノ部分ノ金員

ナ身代持直次第返済スベキ旨ノ証文ノ裏書ヲ裁判所ヨリ受取ルヲ得ベキヲ
 但此時曩ニ身代限ニ遇ヒタル者ノ裏書証文ヲ持出スベシ裁判所ニ於テハ之ニ金員ノ差
 引ヲ記載シ二通ノ証書ヲ一綴ニシテ下附スベシ
 第六條 証文ヲ落札シタル債主證文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取ルベキ期限ニ至ラザ
 ル時証文ニ記載シタル債主即チ曩ニ身代限ニ遇ヒシ人巳ニ身代持直シタルキハ直ニ其人
 ル對シ再ビ金穀ノ返済ヲ請求スルヲ得ベキヲ
 別紙

証文裏書雜形

表書ノ貸主何ノ誰儀年號月日身代限申付候ニ付此証文ハ(入札ヲ以テ渡スルハ此間ニ
 入札ヲ以テノ五字ヲ書キ加フベシ)某府縣管下某國某郡某町某村何ノ誰ニ相渡ッ候條
 此証書ノ金額ハ右何ノ誰ニ濟口致候上其段當裁判所ニ可届出事
 年號月日

某裁判所印

(第五) 身代限財産中質入書入ノ地所アリ債主訴出デザル節處分方 八年四月第五
 地所ノ質入書入ハ尋常ノ私約ト違ヒテ戸長役場ノ帳簿ニ記載シテ與書割印アル公正ノ証書
 ニ付若シ身代限財産中質入又ハ書入ノ地所アリテ其債主揭示中ニ訴出デザル節ハ其地所糶
 賣代價ノ中ニテ債主ノ受取ル可キ元金高ニ糶賣金配ノ日迄ノ利息ヲ加ヘ第一番ニ引去リ裁

判所ニ於テ之ヲ糊封シ掛リ官吏兩名調印ノ上戸長役場ニ貯ケ置後日債主願出次第相渡ス可
 シ候條此旨布告候事
 但質入書入ノ金高及ビ利息等不分明ノ節ハ本人呼出シ取調可申事

(第六) 身代限ノ節現在印紙類處分方

省第七十三号達
 民事訴訟身代限又ハ税金不納ニヨリ財産ノ全部ヲ公賣スル際諸印紙手形用紙ヲ所持スルモ
 ノ及ビ烟草賣藥營業者廢業又ハ其營業稅不納公賣處分ノ際印紙ヲ所持スルモノハ損傷汚染
 ノ分ヲ除キ手数料トシテ代價百分ノ十ヲ上納スルルキハ之ヲ管廳ニ買上グルヲ得
 但買上ゲタル印紙類ハ各廳元受ケニ組入シ買上代金ハ收稅長ヨリ主稅官長ニ別途請求シ
 手数料ハ雜收入トシテ納付スベシ
 (第三節參考)

同指令

(其一) 戸主身代限ノ際非戸主ノ財産處分ノ儀ニ付佐賀縣ヨリ司法省ニ同 十六年十
 一 隱居及尊族ノ動不動産ハ同居別居ヲ不問戸主身代限ニハ連及セサル者ト心得然ル可キ
 哉
 一 子弟及卑族ノ動不動産モ亦尊族ノ財産ト同様心得然ル可キ哉
 一 妻ノ動不動産ハ戸主ノ財産ニ加ヘ可然哉

一以上ノ財産之ヲ區別スルモノニ候ハ、條例成規アル簿冊ニ記名アルモノハ勿論建物船
舶等ノ如キ賣買讓與ノ規則アリテ公証ヲ受ケタルモノ及ヒ現ニ其所有ヲ証スルニ足ル
モノヲ以テ區分ス可キヤ

右差掛候儀之レ有候ニ付至急御指揮相成度此段相伺候也
指令 十六年十月二十九日

伺ノ趣家族ノ財産ハ其同居別居ヲ問ハス公証記名アル公債証書地所及ヒ賣買讓渡
ノ規則アル建物船舶ヲ除クノ外總テ戸主ノ財産ニ組込ムヘキモノトス

(其二) 戸主身代限ノ際非戸主財産處分ノ儀ニ付三重縣ヨリ司法省ヘ伺 十六年十一
官報第百四號中ニ佐賀縣ヨリ戸主身代限ノ際非戸主ノ財産處分ノ儀御省ヘ伺指令登載有
之右御指令ニ家族ノ財産ハ其同居別居ヲ問ハス公証記名アル公債証書地所及ヒ賣買讓渡
ノ規則アル建物船舶ヲ除クノ外總テ戸主ノ財産ニ組込ムヘキモノトストアリ然ルニ村邑
僻地ニ至テハ伯叔父母兄弟等籍ヲ分タスノ別居シ毫モ本家ノ保護ヲ受ケスノ活計ヲ營ミ
自力ヲ以テ産ヲ興シ恰モ一戸獨立ノ姿ヲ爲ス者往々有之若シ此等ノ者ヲシテ戸主ノ身代
限ニ連及セシムルモノトセハ多年ノ盡力一朝水泡ニ屬シ甚タ憫諒スヘキモノアリ右等ノ
如キ單ニ戸主ト其籍ヲ同フスルノミニテ其實絶テ本家ト經濟ノ關係ヲ有セス一家獨立ノ
姿ヲ爲スモノハ其所有ヲ証スルニ足ルモノニ限リ戸主ノ財産ニ組込マサル儀ト心得可然

哉

指令 十六年十二月十三日

伺之趣別居生計ヲ立ツルト雖モ分籍セサル者ノ 産ハ公証記名アル公債証書地所及
ヒ賣買讓渡ノ規則アル建物船舶ヲ除クノ外總テ戸主ノ財産ニ組込ムヘキモノトス

(其三) 身代限財産取調ノ儀ニ付福島縣ヨリ司法省ヘ伺 十七年一月三十一日
戸主身代限ニ係リ候節家族ノ財産ハ其同居別居ヲ問ハス公証記名アル公債証書地所及賣
買讓渡ノ規則アル建物船舶ヲ除クノ外總テ戸主ノ財産ニ組込ムヘキ旨曾テ御指令ノ次第
モ有之右御旨趣ニ基クハ戸主身代限ニ付財産取調之際同人ノ子弟ニシテ他方寄留出稼
キ或ハ官員奉職中ニテ相應ノ資産ヲ所有スルモノアリ是等ノ者戸籍上ヨリ見ルキハ分籍
シタル者ニ非サレハ無論一家族中ト見認メサルヲ得ス右一家族タル以上ハ該子弟ノ財産
ニ推及可取調儀ハ勿論ノ事ト被考候得共聊カ疑義ニ涉リ候條此段相伺候也
指令 十七年二月十九日

伺之通リ

第三章 金穀貸借請人証人辨償規則 明治八年六月
第百二号布告

第一條 金穀借用返濟相滞リ本人身代限濟方申付候上不足相立候節ハ其不足ノ分請人ニ濟

方申渡猶不相濟ニ於テハ其請人ヲモ身代限申付其上不足相立候ハ、借主並ニ請人ハ勿論其相續人ニ至ル迄身代持直シ次第皆濟可致事

第二條 借主逃亡又ハ死去跡相續人無之時ハ其請人ニ濟方申渡シ候上不相濟ニ於テハ身代限申付猶不足相立候ハ、請人ハ勿論其相續人ニ至ル迄身代持直シ次第皆濟可致事

第三條 身代限申付候上不足相立身代持直シ次第皆濟可致旨左ノ雛形ノ通裁判所ニ於テ其原証文ノ裏ヘ記シ押印ノ上貸主ニ可相渡置事

裏書雛形

第一條ノ節書式

表書ノ元利金何百何十圓相滯ルコ付借主何ノ誰身代限申付ル處不足相立請人何ノ誰ヲモ身代限ヲ以テ辨償爲致都合金何百何十圓ハ借主何ノ誰請人何ノ誰ハ勿論其相續人ニ至ル迄身代持直シ次第皆濟可致者也

年月日

某裁判所印

第二條ノ節書式

表書ノ元利金何百何十圓借主何ノ誰失踪死亡跡相續人無之ニ付請人何ノ誰ニ身代限ヲ以テ辨償申付ル處金何百何十圓ニ相成ニ付右請取殘リ何百何十圓ハ請人何ノ誰ハ勿論其相續人ニ至ル迄身代持直シ次第皆濟可致者也

年月日

某裁判所印

第十編 參考諸規則及ビ諸布令

第一章 代人規則

○明治六年六月第二十五號布告
人民一般商業及ビ其他ノ事ニ因リ代人ヲ以テ契約取引等致シ候規則別紙ノ通被定候條此旨
相達候事

代人規則

第一條 凡ソ何人ニ限ラズ已レノ名義ヲ以テ他人シテ其事ヲ代理セシムルノ權アルベシ
但シ本人幼年等ニテ其事理ヲ辯シ難キ時ハ其後見人及ビ親族ノ者協議ノ上代人ヲ任ズル
ヲ得ベシ

第二條 凡ソ他人ノ委任ヲ受ケ其事件ヲ取扱フ者ハ代人ニシテ其事件ヲ委任スル者ハ本人
ナリ故ニ代人委任上ノ所行ハ本人ノ關係タルベシ

第三條 凡ソ代人ハ心術正實ニシテ滿二十歲以上ノ者ヲ撰ム可シ(明治九年第四十四號布告改正ノ文)
第四條 代人ハ總理代人部理代人ノ別アリ總理代人ハ其本人身上諸般ノ事務ヲ代理スル者
ニシテ部理代人ハ特ニ其委任スル部内ノ事務ヲ代理スルヲ得ル者トス

第五條 凡ハ本人ヨリ代人ヲ任シ他人ト契約取引等ヲ爲サント欲スル時ハ必ス實印ヲ押シ
タル委任狀ヲ與フ可シ

但シ其家業ヲ取扱フ場所ニ於テ通常ノ事務ヲ取扱ハシムルノ類ハ別段委任狀ヲ與フルニ及ハス

第六條 委任狀ハ總理代人又ハ部理代人タルコト及ヒ其委任シタル權限ヲ明白ニ記載ス可シ

第七條 委任狀書式左ノ通

抽者 儀其ノ事件ニ付何ノ誰ヲ以テ總理代人ト定メ抽者ノ名義ニテ左ノ權限ノ事ヲ代理

爲致候事

一何々ノ事但シ權限ノ次第ヲ分條記載スヘシ
右代理ノ委任狀仍而如件

年號月日

住所身分

姓 名 印

後見人等ハ住所身分何ノ誰
後見人何ノ誰ト記スヘシ

第八條 代人ヲ任スルノ權限ハ豫メ規定シ難キモノト雖モ其本人幼弱疾病事故等ニテ長ク委任セントスルモ其地方ニ新聞紙アラハ之ニ記入セシメ世上ニ公布スヘシ

第二章 利息

第一節 利息制限法 十年九月第六十六号布告

利息制限法左之通相定候條此旨布告候事

第一條 凡ソ金銀貸借上ノ利息ヲ分テ契約上ノ利息ト法律上ノ利息トス

第二條 契約上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ定メ得ヘキ所ノ利息ニシテ元金百圓以上ハ一ケ年ニ付百分ノ二十割二百圓以上十圓以下百分ノ十五割千圓以上百分ノ十二割以

下トス若シ此制限ヲ超過スル分ハ裁判上無効ノモノトシ各制限ニマテ引直サシムヘシ

第三條 法律上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ利息ノ高ヲ定メサルモ裁判所ヨリ言渡ス所ノ者ニシテ元金ノ多少ニ拘ハラズ百分ノ六トス

第四條 第二條ニ依リ定限利息ノ外總テ人民相互ノ契約ヲ以テ禮金棒利等ノ名目ヲ用ル者アレモ總テ裁判上無効ノモノトス

第五條 返還期限ヲ違フルモ其ハ負債主ヨリ債主ニ對シ若干ノ償金罰金違約金科料等ヲ差出スヘキヲ約定スルコトアルモ概シテ損害ノ補償ト看做シ裁判官ニ於テ該債主ノ事實受ケタル損害ノ補償ニ不當ナリト思量スルモ其ハ之レニ相當ノ減少ヲ爲スコトヲ得

第二節 利息ノ計算

(第一) 貸借其他ノ金穀ニ利息ヲ生スル期日ノ事 六年三月司法省第四十三號布達

預ケ金穀

賣掛代金

諸職人手間代

地代

店賃

立替金穀

敷金

證據金

受負金

手附金

小作金穀

村入用ノ割合金穀

雇人給金

飯料

諸品ノ損料

無利足貸金穀

右ノ類ニテ金穀等可相渡期限ニ臨ミ渡方延滞致候節ハ其期限ノ日且ツ期限ナクシテ金穀入用次第可相渡旨ノ約定ヲ爲シタル分ハ渡方ノ掛合ヲ受ケ候日ヨリ何レモ利息ヲ生シ可申筋ニ付其節ハ双方示談ヲ以テ利息ノ歩合ヲ定メ証書ヲ受取渡シ致スベシ若共儀ナクシテ追テ訴訟ニ及ブ時ハ明治六年第九十二號布告ニ因リ處分致シ候條此旨可相心得候事

但シ債主利息ヲ請求シテ負債者承諾セザル時ニ限リ本文ノ處分ニ及フ可シ若シ双方示談整フカ又ハ債主ニ於テ請求ヲ爲サザル分ハ此例ニ非ズ此但書七年八月司法省(注意)六年第九十二号布告ハ法律上ノ利息ヲ示シタル者ニシテ十年第六十六號布告利息制限法ニ依テ消滅ス

(第二) 負債者身代限ノ節利息計算方 六年十月司法省第百七十四号布達

明治六年當省第三十八號金穀貸借利息ノ儀裁判決定迄計算可致旨及布達置候處右ハ貸借ノ金穀返済ノ日又ハ身代限配當金處分濟ノ日迄利息ヲ計算致シ候儀ト可相心得此旨布達候事(注意)身代限配當處分濟ノ後若シ不足ヲ生スルキハ其不足金ニ利息ヲ生スルモノトス

第三章 後見人職務權限

○明治十六年七月内務省番外達

後見人職務權限ノ儀ニ付別紙ノ通太政官ニ相伺御指令相成候條爲必得此旨相達候事

後見人職務權限ノ儀ニ付伺 十六年五月三十日

後見人規則發布ノ儀ニ目下急施ヲ要スル事項ニ付客年四月十三日上稟シタル旨趣モ有之就テハ伺出ノ府縣ノ退テ一般ノ法律制定相成ルマテ地方從來ノ慣習ニ依リ可取扱旨指令及ヒ來候處爾後後見人職務ノ權限伺出ル府縣夥多有之抑々後見人ハ當初親族ニ於テ撰定シタル者ナレトモ常ニ監察ス可キ方法モ無之ニ付規則御制定マテ不動産賣買讓渡質書入等ニ限リ其証書又ハ願書ニ親族連署ノ上ナラテハ戸長ニ於テ公証ヲ與ヘサル様相定メ其旨指令ニ及ヒ度右ハ成規モ無之ニ付此段相伺候也

伺之趣聞届候事 十六年七月三日

○明治十九年十二月六日司法省訓令第三十九號

來ル明治廿年二月一日以後登記法施行ニ付後見人ヨリ地所建物船舶ノ登記ヲ請フキハ明治

十六年七月十八日內務省達ノ通り其證書又ハ願書ニ親族連署ノ上ナラテハ登記ヲ爲サ、ル
儀ト心得可シ

第四章 証書類讓渡方

○明治九年七月第九十九號布告

金穀等借用證書ヲ其貸主ヨリ他人ニ讓渡スルハ其借主ニ證書ヲ書換ヘシムヘシ若シ之ヲ書
換ヘシメサルニ於テハ貸主ノ讓渡證書有之トモ仍ホ讓渡ノ効ナキモノトス此旨布告候事
但シ相續人へ讓渡候ハ此限ニアラス

第五章 建物書入質ノ節造作ノ有無記載方

○明治十年三月內務省甲第六號布達

明治八年九月第百四十八號ヲ以テ諸建物書入質規則布告相成候ニ付テハ自今其證書面ニ造作
造作トハ月庇。天井。敷居。鴨居。ノ有無記載可致此旨布達候事
縁板。床ノ間。押入等ヲ云フ
(注意)右書入質ノ節此布達ニ背キ造作ノ有無ヲ記載セサルトキハ質取主ハ其造作ニ付テ
ハ先取特權ヲ有セサル可シ

第六章 無能力者、法律ニ定メタル代人、民事擔當人ノ種別

治罪法ニ於テ無能力者法律ニ定メタル代人及ヒ民事擔當人ト稱スル者ハ左ノ通
無能力者

- 一 未丁年者
 - 二 妻タル者
 - 三 白痴瘋癲人
 - 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者
- 法律ニ定メタル代人
- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ親屬
 - 二 夫タル者
 - 三 白痴瘋癲人ノ保管者
 - 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ財産管理人

民事擔當人

- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ同居ノ親屬ニシテ監督ヲ爲ス者
- 二 夫タル者
- 三 白痴瘋癲人ノ保管者
- 四 雇主

但シ雇人其雇主ノ命シタル事件ヲ行フ時
第七章 東京始審裁判所書記局揭示 明治二十年十一月

自今管内治安裁判所ノ裁判ニ服セス控訴ヲ爲ス者アルトキハ原裁判所ハ控訴届ヲ受クルト同時ニ控訴人ノ費用ヲ以テ原訴訟書類ヲ當裁判所ニ送致スルニ因リ控訴狀ニ初審訴狀答書寫等ヲ添ユルヲ要セズ

○刑事之部

○告訴及告發

- 一 告訴及告發ハ書面又ハ口述ヲ以テ被告人所在地ノ豫審判事又ハ檢事ニ之ヲ爲ス
- 一 告訴及告發狀ニハ成ルヘク其事由ヲ明記シテ差出スヘシ
- 一 告訴及告發狀ニハ成ル可ク其証憑及事實參考トナル可キ書類ヲ添ヘ差出ス可シ
- 一 告訴及告發狀ニハ名刺ヲ添ヘ受附掛ニ差出シ而シテ後人民扣所ニ控ヘ居ルベシ
- 一 後キ氏名ヲ呼立ラレタルトキハ直ニ受附所ニ至ル可シ
- 一 豫審又ハ檢事ヨリ告訴及告發ヲ受理シタルノ證ヲ下附セラレタルキハ退廳シテ可ナルヤ否ヲ尋テ其命ニ從フ可シ
- 一 告訴及告發ハ其願下ヲ爲シ又ハ其申立ヲ變更スルヲ得
- 一 告訴及告發ハ代人ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
- 一 無能力者ノ告訴ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲スモ其効アリトス

○私訴

- 一 被害者ハ公訴ニ附帶シ私訴ヲ爲サントスルキハ告訴ト共ニ之ヲ申立テ又ハ告訴シタル後ハ豫審判事ニ申立ツ可シ
- 一 公訴ノ始審終審裁判言渡アルマテ何時ニテモ私訴ヲ爲スコトヲ得

一私訴ノ要求ヲ變更シ又ハ其願下ヲ爲シタル後更ニ其申立ヲ爲シ又其要求スル處ヲ變更スルコトヲ得

一私訴ハ代人ヲ以テ爲スコトヲ得

一被害者無能力ナルキハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲スモノトス

○代人及裁判所出入心得

一代人及裁判所出入心得ハ民事ニ同シ

○呼出ニ依リ出頭シタル時ノ心得

一裁判所ヨリ呼出ヲ受ケ出頭シタルキハ呼出狀ニ名刺ヲ添ヘ受附所ニ差出シ控所ニ控ヘ居ルベシ

一氏名ヲ呼立ラル、キハ返辭ヲ爲シ受附所ニ至リ其指揮ニ從フモノトス

○豫審及公廷ノ心得

一訴訟關係人受付所ヨリ豫審廷又ハ公廷ニ入ルヘキ命ヲ受ケタルキハ直ニ公廷ニ入り椅子ニ控ヘ居ルモノトス

一而シテ豫審判事又ハ裁判官檢察官書記出席アレハ起立シテ禮ヲ爲ス可シ

一他人ノ調ヘアル間ハ靜謐ニナシ且敬ノ所爲アル可カラス

一書記ニ氏名ヲ呼ハレタルトキハ直ニ返辭ヲ爲シ机前ニ進ム可シ

一豫審判事又ハ裁判官ノ命并問ニ對シテハ判明ニ陳述ス可ク成ル可ク聞取リ易ク辨明ス可シ然ラサレハ折角利益ノ申立モ水泡ニ歸スルハ勿論ナリ

一右ノ外證人ハ尙左ノ二事項ヲ踏ムモノトス

一證人トシテ出廷シタルトキハ豫審判事又ハ裁判官ノ命ニ從ヒ宣誓ヲ爲スモノトス

一陳述終レハ證人控席ニ控ユルカ又ハ退廳スベキカ豫審判事又ハ裁判官ノ命ニ從フベ可シ

一鑑定人ハ尙左ノ二事項ヲ踏ムモノトス

一鑑定人トシテ出廷シタルトキモ亦宣誓ヲ爲スモノトス

一豫審判事又ハ裁判官ヨリ鑑定書ヲ差出ス可キ事ヲ命ゼラルレハ豫審廷又ハ公判廷ニ於テ

直ニ認メ書記ニ差出スカ又ハ控所ニ於テ認メ受付所ニ差出スカノ兩様タルベシ

一訴訟關係人ハ後日尙調ブル旨達セラル、時ハ其日ニ出頭スベキノ請書ヲ差出スヤ否ヲ尋テ命ノ如ク爲ス可シ

一後日出頭シタルトキノ手續及公廷ノ心得ハ前ニ同シ

一被告人及民事原告人民事擔當人ニ於テ裁判官ノ口達又ハ呼出ニ依リ出廷シ裁判官言渡サル、トキハ謹デ聞ク可シ

一用事相濟メハ歸宅スルモ可ナルヤ否ヲ受付所又ハ掛官ニ尋テ許可ヲ得テ歸ル可シ

○證人鑑定人ノ心得

- 一 證人鑑定人ハ正當ノ事故ナク出廷セザル時ハ罰金ノ言渡テ受クベシ
- 一 再度ノ呼出コ應ゼズ出廷セザルトキハ初度ノ二陪ノ罰金ヲ言渡サレ且勾引セラル、トアルベシ

但鑑定人ハ勾引セラル、トナシ

- 一 證人鑑定人ハ旅費日當ヲ請求スルコトヲ得

○ 辨護人撰定心得

- 一 被告人ニ於テ所屬代理人ヲ辨護人トナサントスル時ハ其届書ヲ受付所ニ差出ス可シ
- 一 被告事件ヲ審判セラル、他ノ裁判所々屬代理人又ハ代理人ニアラサル者ヲ辨護人トナサントスルキハ其旨ヲ願出許可ヲ受ク可シ

○ 豫審故障

- 一 故障ヲ爲サントスルキハ終結書ノ送達ヲ受ケタルヨリ一日内ニ其申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ

- 一 申立書ヲ差出シタルヨリ三日内ニ趣意書ヲ差出スヘシ

- 一 趣意書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ答辨書ヲ差出スコトヲ得

○ 控訴

- 一 裁判言渡ニ對シ控訴ヲナサントスルキハ五日内ニ申立書ヲ原裁判所書記局ニ差出ス可シ

- 一 被告人控訴ヲ爲スキハ豫審金十圓ヲ原裁判所書記局ニ申立書ト共ニ納附スベシ
- 一 院及裁判所出入及出頭名刺差出方并法廷内ノ心得ハ前ニ同シ

○ 上告

- 一 裁判言渡ニ對シ上告ヲナサントスルトキハ五日内ニ申立書ヲ原裁判所書記局ニ差出ス可シ

但重罪裁判所ノ言渡ニ付テハ言渡アリタルヨリ會議局ノ判決ニ付テハ判決書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ申立書ヲ差出ス可シ

- 一 申立書ヲ差出シタルヨリ五日内ニ趣意書ヲ差出ス可シ

- 一 罰金及追徴ノ言渡ニ付テハ前項趣意書ニ其罰金及追徴金ノ十分ノ一ヲ添へ豫納ス可シ

- 一 趣意書ノ送達ヲ受クタルヨリ五日内ニ答辨書ヲ差出ス可シ

- 一 右ノ書類差出シタル後辨明書ヲ差出スキハ直ニ大審院書記局ニ差出ス可シ

- 一 上告ヲ取消サントスルキハ其願書ヲ原裁判所書記局ニ差出ス可シ

○ 再審

- 一 再審ノ訴ハ裁判確定ノ後刑ヲ受ケタル者又ハ刑ノ言渡ヲ受ケタル者死亡シタル時ハ其親屬ニアラサレハ爲スコトヲ得ス

- 一 再審ノ訴ヲ爲スニハ其趣意書ニ原裁判言渡書ノ謄本及ヒ證憑書類ヲ添へ原裁判所ノ書記

局ニ差出ス可シ

二百四

○保釋責附

- 一 被告人無能力ナル時其親屬又ハ代人ヨリ保釋願出ントスルキハ願書二通ヲ豫審判事又ハ裁判所ニ差出ス可シ
- 一 保釋ノ言渡アリタルキハ被告本人又ハ親屬又ハ代人ヨリ保證金ヲ上納ス可シ
- 一 親屬又ハ代人ヨリ保證金ヲ上納セントスルキハ保證金代納願ヲ差出ス可シ
- 一 保釋人裁判所々在地ニ住セザル時ハ仮住所ノ届ヲ爲ス可シ
- 一 保證ヲ爲スニハ保證金又ハ貯金預所若クハ銀行ノ預リ證書ヲ差出ス可シ
- 一 又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツベキ保證書ヲ差出ス可シ
- 一 被告人ヲ責附セラル、旨言渡シレタルキハ受人ヨリ何時ニテモ呼出ニ應ジ出頭セシムヘキノ受書ヲ差出ス可シ
- 一 保釋又ハ責付中呼出ヲ受ケ正當ノ事故ナク出廷セサルキハ保證金ノ全部又ハ幾部ヲ沒收セラル、コアルベシ
- 一 又保釋責附ヲ取消サル、コアルヘシ

○贍本料

- 一 裁判言渡書ノ贍本又ハ拔書入用ナルキハ其願書ヲ書記局ニ差出ス可シ
- 一 書記局ヨリ贍本ヲ下附セラル、キハ贍本料ハ大藏省現金取扱方ノ預リ證ヲ以テ納附ス可シ
- 一 右預リ證ニ納證ヲ添ヘ差出ス可シ

○罰金及科料

- 一 罰金ハ裁判確定ノ日ヨリ一日内科料ハ十日内ニ納附ス可シ
- 一 罰金及科料モ亦大藏省現金取扱方ノ預リ證ヲ以テ納附ス可シ
- 一 右預リ證ニハ納證ヲ添ヘ差出スベシ

明治十四年七十三號布告

第七十三號

治罪法ニ於テ無能力者法律ニ定メタル代人及ヒ民事擔當人ト稱スル者ハ左ノ通無能力者

- 一 未丁年者
- 二 妻タル者
- 三 白痴瘋癲人
- 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者

二百五

法律ニ定メタル代人

- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ親屬後見人
- 二 夫タル者
- 三 白痴瘋癲人ノ保管者
- 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ財産管理人

民事擔當人

- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ同居ノ親屬ニシテ監督ヲ爲ス者
- 二 夫タル者
- 三 白痴瘋癲人ノ保管者
- 四 雇主

但雇人其雇主ノ命シタル事件ヲ行フ時

右奉勅旨布告候事

明治十四年十二月廿八日

太政大臣三條實美
司法卿 大木喬任

○鑑定書々式

鑑定書

自分義(又ハ自分共)何住所何某何々事件ニ付何々(何某創傷又ハ何々ノ書類又)ノ鑑定ヲ爲ス可キヲ命セラレタルニ由リ左ノ如ク鑑定ス

一何々(鑑定ノ手)シタル處何々(理由ヲ)ナルニ付何々(結果ヲ)ナルヲ明白ナリ(何々結果)

ル能ハザルキヲ測ス(續キ記ス)リト推

一右鑑定ハ本日午前何時ヨリ始メ午後何時ニ終ハレリ

右之通相違無之候以上

年月日

住所職業

氏 名 印

○出頭スヘキ爲メ差出ス請書々式

住所職業身分

氏 名

自分義何々事件ニ付(或ハ何某何々事件ニ付)來ル何月何日午前何時出頭可致旨ノ御達相成奉畏候同日無相違出頭可致依テ御請書奉差上候以上

年月日

右

氏 名 印

○辨護人願書及届書々式

願書(又ハ届書)

自分義何々事件ニ付(若シ届書ナレハ此所へ(當御裁)何府何郡何町職業(若シ届書ナレハ要セサ)何某ヲ以テ辨護人ト相定メ度候間此段御允許被成下度奉願候也(若シ届書ナレハ相定度ノ字ヲ除キ而シテ此段ノ下ニ(御)届申上候也)ト記スヘシ)

○明治十八年第二号布告

第二號

明治十四年十二月第七十四号布告ヲ廢シ自今輕罪ニ係ル控訴ハ左ノ規前ニ從ヒ之ヲナスヲ得

但治罪法中此規則ニ牴觸スル條件ハ當分ノ内施行セス

第一條 控訴ハ治罪法中本案ノ裁判言渡前ニ許シタルモノト雖モ總テ本案ノ裁判言渡アリタル後ニアラサレハ之ヲ爲スヲ得ス

第二條 控訴ノ期限内ハ控訴ヲ爲サスシテ直チニ上告ヲナスヲ得但對手人控訴ヲナシタルキハ此限ニアラス

第三條 控訴ヲナスシテ直ニ上告ヲ爲シタルキハ原裁判言渡ニ對シ更ニ控訴ヲナスヲ得ス
第三條 被告人公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴ヲナサントスルキハ裁判費用ノ保証トシテ金十

圓ヲ豫納スヘシ
第四條 被告人ニ於テ証人鑑定人ノ呼出ヲ請求スルキ前條保證金ニテ不足ト認ムル場合ニ

於テハ別段其費用ヲ豫納セシムヘシ

五條 治安裁判所ニ於テナシタル輕罪ノ裁判言渡ニ對スル控訴ハ管轄輕罪裁判所ニ之ヲナスヘシ其控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ治罪法中輕罪ノ控訴ニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲナスヘシ其控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ治罪法中輕罪ノ控訴ニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判スヘシ

右奉勅旨布告候事

明治十八年一月六日

○罰金及追徴ニ係ル上告豫納金

明治十九年勅令第四十六號

朕罰金及追徴ニ係ル上告豫納金ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御

明治十九年六月九日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文
司法大臣 伯爵山田顯義

太政大臣公爵三條實美
司法卿 伯爵山田顯義

勅令第四十六號

罰金及追徴ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲サンヌルトキハ其罰金及追徴金ノ十分ノ一ニ當ル金額上告趣意書ニ添へ原裁判所書記局ニ預置シ可シ否ヲザレハ上告ヲ爲スコトヲ得ズ若シ上告不當ナルトキハ大審院ニ於テ其全部又ハ幾分ヲ没入スルノ言渡ヲ爲スベシ

○保証書書式

保証書

何府何郡何町身分職業

何 某

右之者義今般保釋願上御許可相成候ニ付保証金何圓ハ何時ニテモ自分ヨリ完納可仕候也

何府何郡何町身分職業

何 某印

年月日

自署

○責附手續 明治十四年第四十七號布告第四十七號

刑事裁判所ニ於テ被告人ヲ責附スルハ左ノ手續ニ從フベシ 此旨布告候事

明治十四年九月二十日

太政大臣三條實美
司法卿大木喬任

第一條

被告人ヲ責附スルニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應ジ出廷セシムベキノ證書ヲ其裁判所書記局ニ差出サシムベシ

第二條

責附中被告人ヲ呼出スルハ出廷ヨリ二十四時前ニ其通知ヲ爲スベシ

第三條

被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セザル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ責附ヲ取消スベシ

責附受書々式

何府何郡何町身分職業

何 某

右之者義御審問中自分へ責付相成候ニ付テハ何時ニテモ御呼出ニ應ジ出廷致サセ可申此段

右何某(親屬又ハ故舊)

何所職業

何 某印

年月日

○明治十四年司法省甲第七号達
甲第七號

治罪法第三百十五條裁判言渡ノ謄本又ハ其拔書ヲ求ムル者ハ其用紙一枚金三錢ノ費用ヲ上
納スル義ト可心得此旨布達候事

明治十四年十二月二日

司法卿大木喬任

○納證書式

納證

一金何程 宣告書謄本料何枚分(罰金又ハ科料)

但壹枚ニ付金三錢

右相納候也

何府何郡何町何番地

何

某

年月日

何裁判所

御中

○附錄

第一章 登記法

朕登記法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治十九年八月十一日

内閣總理大臣伯爵 伊藤博文
大藏大臣伯爵 山縣有朋
司法大臣伯爵 松方正義
山田顯義

法律第一號

登記法

第一章 總則

第一條 地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入ノ登記ヲ請フ可シ
ハ其所在地船舶ハ其定繫場ノ登記所ニ登記ヲ請フ可シ

第二條 蛇所建物船舶ノ賣買讓與質入書入ノ登記ハ始審裁判所長之ヲ監督ス可シ

第三條 登記事務ハ治安裁判所ニ於テ之ヲ取扱フモノトス治安裁判所遠隔ノ地方ニ於テハ
郡區役所其他司法大臣ノ指定スル所ニ於テ之ヲ取扱ハシム

第四條 登記所ノ位置及其管轄ノ區域ハ司法大臣之ヲ定ム

第五條 登記官吏ハ登記事務取扱ニ付テハ始審裁判所長ノ監督ヲ受クルモノトス

第六條 登記簿ニ登記ヲ爲サ、ル地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入ハ第三者ニ對シ法律上其妨ナキモノトス

第七條 地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入ニ付キ登記ス可キ概目左ノ如シ

第一 地所ハ郡區町村名、字、番地目、反別若クハ坪數、地券面ノ價格

第二 建物ハ郡區町村名、字、番地、地目、構造ノ種類、建坪、造作ノ有無

第三 西洋形船舶ハ汽船、風帆船ノ區別、船名、番號、登簿噸數、公稱馬力、汽機及汽罐ノ種類、端船其他必要ノ所屬品

第四 日本形船舶ハ船名、番號、積石數、間數、端船其他必要ノ所屬品

第五 登記ノ事由

第六 金額

第七 質入書入ハ其期限及利息

第八 所有者及登記ヲ受クル者ノ氏名住所

第九 一筆ノ又ハ一棟ノ建物ヲ區別シ賣買讓與質入書入ヲ爲スルハ其事實

第十 二番以後ノ書入ヲ爲シ又ハ書入ニ爲シタルモノヲ質入ト爲シ質入ニ爲シタルモノヲ書入ト爲スルハ其事實

第十一 登記ノ年月日

第八條 登記ヲ請フ者アルルハ登記官吏直ニ前條ノ概目ヲ審查シテ登記簿ニ登記シ本人ニ之ヲ示シ又ハ讀聞セタル上本人ヲシテ署名捺印セシメ且之ニ署名捺印ス可シ

第九條 地所建物船舶ニ關スル差押假差留假處分及地所建物ノ收益差押ニ付テハ裁判所ノ命令書ニ依リ登記簿ニ其記入ヲ爲ス可シ

前項ノ記入ハ裁判所ノ命令アルルニ非サレハ之ヲ取消スヲ得ス

第十條 登記ハ第十五條第二項及第十六條第十七條第十八條ヲ除クノ外契約者双方ノ請求若クハ裁判所ノ命令アルルニ非サレハ之ヲ爲シ又ハ變更シ又ハ取消スヲ得ス

第十一條 登記ノ謄本又ハ拔書又ハ一覽ヲ要スル者ハ其登記所ニ出頭シテ之ヲ請求スルヲ得

第十二條 登記官吏ノ職務執行上ニ關シ不服アル者ハ管轄始審裁判所ニ抗告スルヲ得

第十三條 登記ニ關スル取扱ノ手續及登記簿ノ書式ハ司法大臣之ヲ定ム

第二章 賣買讓與

第十四條 地所建物船舶ノ賣買讓與ニ付キ登記ヲ請フルハ契約者双方出頭シ其證書ヲ示ス可シ

前項ノ場合ニ於テ其物件質入書入中ニ係ルルハ買受人讓受人ニ於テ之ヲ了知セル旨ヲ申出其記入ヲ請フ可シ

第十五條 家督相續ニ因リ地所建物船舶ノ登記申請フキハ双方出頭シ其證書ヲ示スヘシ
死亡者失踪者若クハ離縁戸主ノ遺留シタル地所建物船舶ヲ相續スル者登記申請フキハ親
屬又親屬ナキキハ近隣ノ戸主二名以上連署ノ書面ヲ差出シ且證明書類アルモノハ之ヲ示
スヘシ

第十六條 行政官廳ノ公賣處分ニ因リ地所建物船舶ノ所有權ヲ得タル者登記申請フキハ落
札達書及其代金完納ノ證書ヲ示スヘシ

第十七條 官有ノ地所建物船舶ノ拂下又ハ無代價下渡ヲ受ケ登記申請フキハ其指令ノ本書
若クハ達書ヲ示スヘシ

第十八條 民有ノ地所建物船舶ヲ官有ト爲シタルキハ其官廳ハ第七條ノ概目ヲ示シテ登記
ヲ求ム可シ

第十九條 裁判執行上ノ糶賣若クハ入札ニ因リ地所建物船舶ノ所有權ヲ得タル者アルキハ
裁判所ノ命令ニ依リ其登記ヲ爲ス可シ

第二十條 地所船舶買賣讓與ノ登記ヲ受ケ地券鑑札ノ下付若クハ書換申請ハントスル者ハ
登記所ヨリ登記済ノ證ヲ受クヘシ

第三章 質入書入

第二十一條 地所建物船舶ノ質入書入ニ付登記申請フキハ契約者双方出頭シ其證書ヲ示ス

ヘシ

貸借ノ爲メニ非スシテ義務ヲ果ス可キ保證ノ爲メ地所建物船舶ヲ質入書入ト爲シ其登記
申請者モ亦前項ノ規定ニ依ル可シ

第二十二條 書入ノ地所建物船舶ヲ重ネテ書入ト爲スキハ第二債主ニ於テ之ヲ了知セル旨
ヲ申出其記入申請フヘシ書入ト爲リタル地所ヲ質入トキシ又ハ質入ト爲リタル地所ヲ書
入ト爲スキ亦同シ

第二十三條 質入書入契約ノ全部若クハ一部ノ解除又ハ變更ニ付キ登記申請者ハ契約者
双方出頭シ其證書ヲ示ス可シ

第二十四條 同一ノ地所建物船舶ニ付キ數個ノ登記ヲ爲スキハ其登記申請日時ノ前後ニ
因リ登記ノ順序ヲ定ムルモノトス

第四章 登記料及手数料

第二十五條 地所建物船舶買賣ノ登記ニ付テハ其買受人左ノ賣買代價ノ區別ニ從ヒ每一件
ニ付記料ヲ納ムヘシ

賣買代價

登記料

五圓未滿

五錢

五圓以上
拾圓未滿

拾錢

拾圓以上	貳拾五錢
貳拾五圓未滿	貳拾五錢
五拾圓未滿	五拾錢
五拾圓以上	壹圓
百圓未滿	壹圓
百圓以上	貳圓
貳百圓未滿	貳圓
貳百圓以上	三圓
三百圓未滿	三圓
三百圓以上	四圓
四百圓未滿	四圓
四百圓以上	五圓
五百圓未滿	五圓
五百圓以上	六圓
七百五拾圓未滿	六圓
七百五拾圓以上	七圓
千圓未滿	七圓

千圓以上	八圓
千五百圓未滿	八圓
千五百圓以上	九圓
貳千圓未滿	九圓
貳千圓以上	拾圓
五千圓未滿	拾圓
五千圓以上	拾貳圓
壹萬圓マテ	拾貳圓

以上五千圓マテ毎ニ貳圓ヲ增加ス

第二十六條 地所建物船舶讓與ノ登記ニ付テハ其讓渡人讓受人ニ於テ時價相當ノ價格ヲ定メ前條ニ掲グル金額ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其讓受人ヨリ登記料ヲ納ム可シ

第二十七條 所地建物船舶質入書入ノ登記ニ付テハ其質入書入人ハ第二十五條ニ掲グル金額ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其登記料ノ半額ヲ納ム可シ但一件ニ付金五錢ヨリ下スコトヲ得ス

第二十八條 第二十一條第二項ノ登記ニ付テハ價格ヲ定メ前條ノ例ニ依リ其登記料ヲ納ム可シ

第九條第一項ノ記入ニ付テハ其價格ノ定マリタル物件ハ其價格又其價格ノ定マラサル物件ハ時價相當ノ價格ヲ定メ前條ノ例ニ依リ其登記料ヲ納ム可シ

第二十九條 第十五條ノ登記ニ付テハ時價相當ノ價格ヲ定メ第二十五條ニ掲クル金額ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其登記料ノ五分ノ一ヲ納ム可シ但一件ニ付キ金五錢ヨリ下スヲ得ス

第三十條 左ノ掲クル者ハ手数料トシテ金五錢ヲ納ム可シ
第一 登記事件ノ取消又ハ其變更ノ登記ヲ請フ者ハ每一件
第二 登記ノ謄本若クハ拔書ヲ請フ者ハ每一枚
第三 登記ノ一覽ヲ請フ者

第三十一條 左ニ掲クル者ハ登記料及手数料ヲ要セス
第一 官廳ノ請求ニ係ル、

第二 公立ノ學校、病院、公園、及養育院ニ係ル登記、

第三 社寺、堂宇、及墳墓地ニ係ル登記、

第四 人民共有ノ用惡水路、溜池敷、堤敷、井溝敷、及公衆ノ用ニ供スル道路ニ係ル登記、
第三十二條 登記所ニ於テ第二十五條第二十六條第二十八條第二項及第二十九條ニ從ヒ届ケ出タル價格ヲ不相當ト認ムルキハ其事件ニ關係ナキ者三名ヲ選ヒ之ヲ評價人ト爲シテ其價格ヲ評定セシム可シ

第三十三條 評價人ノ評定シタル價格届出ノ價格ヨリ増加スルキハ其評價ニ關スル費用ハ其登記料ヲ納ムル者之ヲ負擔ス可シ若シ其價格届出ノ價格ト同價又ハ低下ナルキハ該費

用ハ其登記所ニ於テ之ヲ支辨ス可シ

第三十四條 評價人ニ選ハレタル者ハ正當ノ事由ナクシテ之ヲ辞スルコトヲ得ス

第三十五條 評價人ノ日當ハ登記所ノ見込ヲ以テ一日金貳拾錢ヨリ五拾錢マテヲ給ス可シ

第五章 罰則

第三十六條 詐偽ノ所爲ヲ以テ登記料ヲ減脱シ及之ニ通謀シタル者ハ二圓以上百圓以下ノ

罰金ニ處ス

第三十七條 本法ニ依リ罰金ニ處スル者ハ刑法ノ不論罪及減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

附則

第三十八條 明治十年第二十八號布告船舶買賣書入質手續同十三年第五十二號布告土地賣

買讓渡規則同十四年第三拾號布告地券證印稅則其他從前ノ法律規則中本法ニ牴觸スルモノハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

第三十九條 地所賣買讓與荒地起返開墾欵下年期明等總テ地券下附書換ニ係ル手續及其手

數料ハ大藏大臣之ヲ定ム
第四十條 登記所ノ登記簿ニ未ダ登記セサル地所建物船舶ニ付登記ヲ請フ者ハ地所建物ハ其所在地船舶ハ其定繫場ノ戶長ノ證書ヲ以テ其所有者タルコト及其物件ニ故障ナキコトヲ示

ス可シ

第四十一條 本法ハ明治二十年二月二日ヨリ之ヲ施行ス

第二章 登記請求手續

○司法省令甲第五號 明治十九年十二月三日

本年八月法律第一號ヲ以テ登記法創定ニ付キ明治二十年二月以後登記ヲ請フ者ハ左ノ手續ニ依ル可シ

第一條 登記ヲ請フ者ハ第一號書式ニ準シ登記ノ件目等ヲ記載シ實印ヲ押シタル名刺ヲ登記所ニ差出ス可シ

登記簿ノ謄本若クハ抜書又ハ登記簿ノ閲覧ヲ請フ者亦同シ

第二條 後見人ヨリ登記ヲ請フキハ後見人タルノ證書ヲ登記所ニ差出ス可シ
代人ヲ以テ登記ヲ請フキハ代理ノ委任狀ヲ付與シ之ヲ登記所ニ差出サシム可シ

第三條 初テ登記ヲ請フ者ハ第二號書式ニ準シ區戸長ノ證明シタル印鑑ヲ登記所ニ差出ス可シ

第四條 地所ニ付キ初テ登記ヲ請フ者ハ地券ヲ登記官ニ示ス可シ但現ニ質入中ノ地所ニ付テハ此限ニ在ラス
船舶ニ付テハ鑑札ヲ示ス可シ但船舶ニ釘付シタルモノハ此限ニ在ラス

第五條 建物ニ付キ登記ヲ請フキハ其圖面ヲ登記所ニ差出ス可シ

建物ノ圖面ハ邸地ノ形狀坪數(段別)方位及ヒ建物ノ形狀間尺位置等ヲ記シ登記ヲ受ク可キ建物ノ圖ハ墨引墨字ト爲シ登記外ナル建物アルキハ其圖ハ朱引朱字ト爲ス可シ
建物ノ圖面ニハ登記法第九條第十六條第十七條第十八條第十九條ノ場合ヲ除ク外結約者双方之ニ署名捺印ス可シ但同第十五條第二項ノ場合ニ於テハ親屬又ハ近隣戸主之ニ連署ス可シ

地所船舶ニ付キ圖面アルキモ亦前項ニ定メタル署名捺印若クハ連署ヲ要ス

第六條 地所ヲ分割シテ賣買讓與シ又ハ質入書入ト爲スキハ前條ニ準シ其圖面ヲ差出ス可シ

第七條 裁判執行上ノ糶賣若クハ入札ニ因リ地所建物船舶ノ所有權ヲ得タル者其登記ヲ請ヒ又ハ地所建物船舶ニ關スル差押假差留假差留假處分及地所建物ノ收益差押ニ付キ記入若クハ取消ヲ請フニハ裁判所ヨリ其命令書ヲ受ケ之ヲ登記所ニ示ス可シ
裁判言渡ニ依リ登記變更若クハ取消ヲ請フキ亦前項ニ同シ

第八條 登記法第三十二條ニ依リ評價ヲ要スルキハ登記所ノ命令ニ從ヒ登記料ヲ納ムル者ヨリ評價費用ノ見積金額ヲ豫納ス可シ

第九條 登記濟ノ證ヲ請者ハ第三號書式ニ準シ物件等ヲ記載セル願書ヲ登記所ニ差出ス可シ

第十條 登記ヲ受ケタル物件ノ全部若クハ一部毀壞燒失流亡等ニ依リテ消滅シタルキハ其物件ノ所有者ヨリ登記ヲ爲シタル登記所ニ書面ヲ以テ其旨ヲ届出ツ可シ但其物品質入書入又ハ差押差留等ニ係ルキハ債主又ハ差押差留等ノ權利者ノ連印ヲ要ス
地目變換ノ場合ニ於テモ亦前項ノ例ニ準シ届出ヲ爲ス可シ

第十一條 船舶ノ定繫所ヲ更改シタルキハ原登記所ヨリ登記簿ノ謄本ヲ受ケ之ヲ轉入地ノ登記所ニ差出シ其登記ヲ請フ可シ
同一ノ登記所ニ屬スル町村ニ轉入シタル場合ニ於テハ其登記所ニ登記ノ變更ヲ請フ可シ

第一號書式(用紙半紙半截)

地所 賣買(讓與)ニ付登記願
建物 賣買(讓與)ニ付登記願
船舶 賣買(讓與)ニ付登記願
此代價 金何圓
此價格 金何圓
此登記料金何圓何錢

住所 讓渡人氏名 ㊟
住所 買受人氏名 ㊟

年月日

又ハ 何々質入ニ付登記願
此貸借金何圓
此登記料金何圓何錢
又ハ 家督 相續ニ付登記願
遺產 此價格金何圓
此登記料金何圓何錢
又ハ 何々拂下ヲ得候ニ付登記願
此拂下代價金何圓
此登記料金何圓何錢
又ハ 何々登記ノ謄本又ハ拔書下付願
此手數料金何錢
又ハ 何々登記簿閱覽願
此手數料金何錢

又ハ

登記取消又ハ變更願
此手數料金何錢

他皆以上ノ例ニ倣ヒ各別ニ認ム可シ

第二號書式(印鑑用紙豎五寸横一寸但厚紙ヲ用フ可シ)

印鑑證明願

區役所
又ハ戸
長役場
ノ印

印鑑

何國何郡何町何番地

何

某

右印鑑御證明被成下度奉願候也

明治何年何月何日

何國何郡何町何番地

何

某印

某區
戸長何某殿

右印鑑相違無之候也

明治何年何月何日

某區
戸長何

某

官印

第三號書式甲

地所登記濟證下付願

何郡何町(村)字何
何番地

一 田何反何畝步
地價金何圓

同郡同町(村)字何
何番地

一 畑何畝步
地價金何圓

右ノ地所今般何郡何町(村)何番地何某ヨリ讓受(買受)候ニ付地券書換願出度候間登記濟
ノ證御下付被成下度此段奉願候也

年 月 日

何郡何町(村)何番地

何

某印

某登記所

御中

登記濟



明治何年何月何日

第三號書式乙

船舶登記濟證下付願

定繫所何

第何號 (鑑札番號)

一 西洋形船何々丸

檣 何本

長 何尺

幅 何尺

深 何尺

登簿噸數 何噸

公稱馬力 若干

氣機 何々

氣鐘 何々

端船 何々

何々 何々

何々 何々

又ハ

定繫所何 第何號 (鑑札番號)

一 日本形船何々丸

石數 何石積

長 何間

幅 何間

深 何間

端船 何艘

何々 何々

何々 何々

右ノ船舶今般何郡何町(村)何番地何某ヨリ買受(讓受)候ニ付鑑札書換願出度候間登記濟

ノ證御下付被成下度此段奉願候也

年月日

何郡何町(村)何番地

某登記所

何 某印

御中

登記 濟



明治何年何月何日

第三章 登記法取扱規則

○司法省訓令第三十二號 明治十九年十二月三日

裁判所 登記所

本年法律第壹號ヲ以テ登記法創定ニ付登記法取扱規則左ノ通之ヲ定ム

登記法取扱規則

第一章 登記所印章及ビ登記簿

第一條 登記所ハ隸書ヲ以テ其署名ヲ刻シタル印章大小二顆ヲ調製シ其印彰ヲ管轄始審裁

判所ニ届ケ置クベシ

第二條 登記簿ハ地所建物船舶ヲ分テ別冊ト爲ス可シ

登記簿ハ前項ノ外町村毎ニ冊ヲ分テ之ヲ設ク可シ但シ事件寡少ナル町村ニ付テハ數町村

ヲ合セ一冊ト爲スヲ得此場合ニ於テハ各町村毎ニ見出テ附ス可シ

第三條 登記簿ハ一用紙毎ニ登記物件ノ番號ヲ附シ且其一用紙ヲ表題欄ヲ設ケタル所ヲ云

フ以下 及ビ甲乙丙ノ三區ニ分テ仍ホ其表題及ビ各區ヲ數欄ニ分ツモノトス

其表題ハ登記法第七條ノ一二三四ニ掲ゲタル項目ヲ登記スルノ所トス

其甲區ハ所有權ノ得有即チ賣買讓與等ヲ登記スルノ所トス

其乙區ハ抵當即チ質入書入ヲ登記スルノ所トス

其丙區ハ執行上ノ抵當即チ登記法第九條ニ記載シタル諸件ヲ記入スルノ所トス

第四條 登記簿ハ登記所ノ請求ニ因リ始審裁判所長之ヲ渡スモノトス

登記所ハ凡一年間用フベキ登記簿ノ冊數及各冊ノ枚數ヲ見積リ豫メ前項ノ請求ヲ爲ス可

シ

第五條 登記簿ハ始審裁判所長其枚數ヲ表紙ノ裡面ニ記載シテ之ニ氏名ヲ署シ官印ヲ捺シ

且每葉ニ契印ス可シ

第六條 町村ノ分合アリタル場合ニ於テハ登記所ハ其旨ヲ始審裁判所長ニ申告シ更ニ分合

セシ町村ニ對スル登記簿ノ下付ヲ受ク可シ

前項ノ場合ニ於テ舊登記簿其他之ニ屬スル帳簿ハ現状ノ儘之ヲ保存シ已ニ登記シアル變更取消ハ其登記簿ニ登記ス可シ

第二章 登記手續

第七條 登記所ニ於テハ受付帳ヲ製シ置キ登記ノ出願若クハ請求等ノ順序ニ從ヒ之ニ其受付事件ヲ記載シ番號ヲ付ス可シ

第八條 登記官ハ受附番號ノ順次ニ從ヒ願人ヲ取調ベ又ハ請求書等ヲ審査シ且登記簿ニ就キ本人ノ所有物件ナルコトヲ確認シ仍ホ質入書入又ハ差押差留等ノ記入ノ有無ヲ調査シ若シ是等ノ登記アルキハ之ヲ本人ニ示シタル上登記ノ手續ヲ爲ス可シ
登記官ハ登記ヲ爲ス前本人ノ印影ヲ檢シ區戸長ノ證明アル印鑑ト符合スルニ非ザレバ登記ヲ爲ス可ラズ

第九條 登記簿ニ未ダ登記セザル地所建物船舶ニ付キ初テ登記ヲ爲ス場合ニ於テ治安裁判所及ビ郡役所ニアル登記所ハ地券鑑札及ビ所管ノ公簿並ニ登記法第四十條ニ記載スル證書ニ依リ戸長役場ニアル登記所ハ地券鑑札及ビ所管ノ公簿並ニ其戸長役場ノ公簿若クハ登記法第四十條ニ記載スル證書ニ依リ物件ノ所有者ヲ確認シ其物件ニ故障ナキニ於テハ先ツ登記簿表題ノ部ニ其物件ヲ記載シ所有者ヲシテ之ニ認印セシメタル上各區ニ登記ノ

手續ヲ爲ス可シ

第十條 抵當ヲ登記スル場合ニ於テ未ダ物件及ビ所有者ノ登記アラザルトキハ前條ノ手續ヲ爲シタル上甲區中登記事由ノ欄内ニ書入若クハ質入ノ登記出願ニ付キ何々ノ證書鑑札及ビ登記法第四十條ニ記及ビ何々ノ公簿前條ノ公簿ニ依リ記載セシ旨ヲ記シ負債者即チ物件ノ所有者ヲシテ所有者ノ欄内ニ署名捺印セシメタル上乙區中ニ出願事件ノ登記ヲ爲ス可シ

執行上ノ抵當ヲ記入スル場合ニ於テ未ダ所有者ノ登記アラサルキハ登記官ニ於テ前條及ビ本條前項ノ手續ヲ爲シ物件及ビ所有者ノ氏名ヲ記載シ其側ニ認印シタル上丙區中ニ命令事件ノ記入ヲ爲ス可シ但後日其物件ニ關シ所有者ヨリ他ノ登記ヲ出願シタルキハ所有者ヲシテ物件ニ認印シ及ヒ其氏名ノ下ニ捺印セシム可シ

第十一條 登記所物件ノ番號ハ初メテ其物件ヲ記載スル毎ニ出願若クハ請求ノ順序ニ從ヒ之ヲ付スルモノトス但其番號ハ町村毎ニ之ヲ區別シ仍ホ地所建物船舶ヲ區別シテ之ヲ付ス可シ

同時ニ登記ヲ求メ且ツ同一ノ所有者ニ屬スル同種類ノ物件ハ同町村内ニ在リテ且合録ノ爲メ混雜ヲ生スルノ憂ナキニ於テハ之ヲ同番號中ニ記載ス可シ若シ其物件多數ニシテ同番號中ニ記載スル能ハサルキハ所有者ノ意見ヲ聽キ便宜分割シテ之ヲ次ノ番號中ニ記載

スルヲ得

第十二條 一番號中ニ登記セシ數物件ヲ分テ又ハ一物件ヲ割テ賣買讓與スルキハ表題部中取消ノ欄内ニ其要領及ヒ第何號ニ移シタルヲ記載シ分割シタル物件ハ未タ登記ヲ爲サル用紙ニ記載シテ新番號ヲ附シ且第何號ヨリ移シタルヲ附記ス可シ其他ノ手續ハ通常ノ場合ニ同シ

前項ノ場合ニ於テ舊番號中分割セラレタル物件ハ之ヲ朱抹ス可シ若シ一物件ヲ割キタルキハ更ニ殘餘ノ現狀ヲ記載ス可シ

數番號ニ登記セシ物件ヲ合併シテ賣買讓與スルキハ各番號中甲區登記事由ノ欄内ニ其旨ヲ明記シテ登記ヲ爲ス可シ

第十三條 一番號中ノ物件ヲ分割シテ質入書入ト爲シ若クハ差押差留等ト爲スルキハ乙區若クハ丙區ノ抵當事由欄内ニ何々ノ物件ヲ質入書入若クハ差押差留等ト爲シタルヲ明記シテ登記ヲ爲ス可シ

數番號ニ屬スル物件ヲ合併シテ質入書入ト爲ストキハ各番號中乙區抵當事由ノ欄内ニ其旨ヲ明記シテ登記ヲ爲ス可シ

第十四條 質入書入ト爲リタル物件ヲ賣買讓與スルトキハ甲區登記事由ノ欄内ニ買受人讓受人ニ於テ其質入書入中ニ係ルヲ了知セル旨ヲ明記シテ登記ヲ爲ス可シ

登記法第二十二條ノ場合ニ於テモ亦前項ノ例ニ準據ス可シ

第十五條 物件ヲ分割シテ賣買讓與スル爲メ第十二條ノ手續ヲ爲ス場合ニ於テ新ニ番號ヲ付スヘキ物件已ニ舊番號ノ物件ト共ニ質入書入ト爲リタルモノナルトキハ新番號ノ表題部中物件ヲ記載シタル側ニ第何號ヲ云フ

ヲ付記ス可シ

其抵當ヲ取消シタル場合ニ於テハ前項ノ付記ヲ朱抹ス可シ

第十六條 質入書入ノ權ヲ賣買讓與シ合テ除ク又ハ他人ニ於テ負債者ノ負債ヲ辨濟シテ債主ノ權ニ代ル等抵當權ノ他人ニ移リタル場合ニ於テ負債者承諾ノ上登記ヲ出願シタルト

キハ之ヲ乙區變更ノ欄内ニ登記ス可シ

質入書入ノ債主負債者ト協議ノ上抵當物件ヲ引取り所有者ト爲リタル場合ニ於テハ乙區

抵當取消ノ欄内及ヒ甲區登記事由ノ欄内ニ其要旨ヲ登記ス可シ

第十七條 質入ヲ變更シテ書入ト爲シ書入ヲ變更シテ質入ト爲シ又ハ利息期限等ヲ變更シタル場合ニ於テハ之ヲ乙區變更ノ欄内ニ登記ス可シ

第十一條 登記法第十五條ノ場合ニ於テ登記ヲ爲ス可キ土地若シ華族世襲財產ナルトキハ地券及ヒ同第四十條ニ記載スル證書ニ依リ世襲財產タルヲ認メ其旨ヲ表題部中物件ノ側ニ記入ス可シ

第十九條 賣買讓與其他ノ方法ニ因リ曾テ地所建物船舶ノ所有權ヲ得タル者其所有權ノ登記ヲ出願スルトキハ第九條ノ例ニ準シ之ヲ登記ス可シ

第二十條 従前ノ公証簿ニ登記セシ質入書入ノ取消ヲ願出タルトキハ手数料ヲ徴収セズ舊手續ニ依リ之ヲ終結ス可シ

若シ變更ノ登記ヲ願出タルトキハ第十條ノ例ニ準シ所有者及ヒ原契約ヲ登記シタル上乙區變更ノ欄内ニ其登記ヲ爲ス可シ此場合ニ於テハ變更ノ手数料ヲ徴収ス可キモノトス

第二十一條 登記ヲ受タル物件ノ全部若クハ一部毀壞燒失流亡等ニ依リテ消滅シ其旨ヲ届出タルトキハ表題部中取消ノ欄内ニ之ヲ登記シ其物件ハ朱抹ス可シ若シ殘餘アルトキハ

第十二條第二項ノ例ニ準シ其現狀ヲ記載ス可シ
地目變換ヲ届出タルトキハ表題部中記載シタル地目ヲ更正シ其旨ヲ附記ス可シ

前二項ノ場合ニ於テハ手数料ヲ徴収セザルモノトス
第二十二條 登記所ノ同管内ニ在テ船舶ノ定繫所ヲ更改シ其登記ヲ請フ者アルキハ轉入ス

セシ町村ノ登記簿ニ其物件及所有者ヲ轉寫シ表題部中物件ヲ記載シタル側ニ某町村ヨリ轉入セシ旨ヲ付記シ若シ船舶既ニ抵當物トナリタル者ナルキハ其旨ヲモ付記ス可シ轉

出セシ町村ノ登記簿ニハ其表題部中取消ノ欄内ニ轉出ノ旨ヲ記載ノ其物件ハ朱抹ス可シ
若シ他ノ登記所ヨリ登記簿謄本ニ其旨ヲ付記シ之ヲ本人ニ下付シテ轉入スル登記所ニ

出サシノ其登記所ハ其謄本ニ依リ登記ヲ爲シ登記簿ノ通知書ヲ原登記所ニ送致ス可シ原登記所ハ其通知ニ依リ取消ノ手續ヲ爲ス可シ

前二項ノ場合ニ於テハ登記法第三十條第一第二ノ規則ニ依リ變更及ヒ謄本ノ手数料ヲ徴收スルモノトス

第二十三條 登記簿ニ記載スル願人ノ氏名ハ本人ヲシテ自署セシメ其名下ニ捺印セシム可シ若シ自署スル能ハサルキハ登記官代書シ其旨ヲ付記ス可シ

第二十四條 登記事件ニ附屬スル圖面アルトキハ登記簿表題部中ニ其旨ヲ記載シ其圖面ニ登記物件ノ番號ヲ記シ登記官之ニ認印シ帳簿ニ編入ス可シ

第二十五條 登記ノ爲メ差出シタル契約書ニハ登記簿ノ上登記官之ニ登記物件ノ番號ヲ記載シ且ツ認印シテ本人ニ還付ス可シ

第二十六條 登記簿ノ一用紙中或ル欄内更ニ登記ヲ爲スヘキ餘白ナキニ至リタルトキハ其登記簿中未タ登記ヲ爲サル他ノ用紙ニ原番號ヲ轉寫シ之ニ其番號ノ第二ナルコトヲ附記シ原用紙番號ノ下ニハ第一ノ文字ヲ追加シ且第何冊何丁ニ續ク旨ヲ記載ス可シ第三以

下ノ續ヲ設クルトキ亦此例ニ準ス
前項ノ場合ニ於テ新用紙ニハ原用紙ニ記載アル登記ノ順番ヲ繼續シテ之ヲ附ス可シ

第二十七條 登記簿ニ登記ヲ爲ス字體ハ楷書ヲ用ヒ鮮明ナルヲ要ス又金錢物品ノ員數及ヒ

年月日ヲ記スルニハ必ス壹貳參拾ノ文字ヲ用フ可シ
登記ヲ爲スニハ之ヲ墨書ス可ク訂正若クハ挿入等ヲ爲スニハ之ヲ朱書ス可シ
文字ハ之ヲ改竄ス可カラス若シ剛除スルキハ讀得ヘキ爲メ字體ヲ存ス可シ
訂正挿入削除等ヲ爲シタルキハ本人ヲシテ之ニ認印セシム可シ

第二十八條 後見人若クハ代人ヨリ登記ヲ出願セシキハ後見人タルノ證若クハ代理ノ委任
狀ヲ差出サシメ之ヲ帳簿ニ編入ス可シ
前項ノ證書ヲ差出サ、ルキハ登記ヲ爲ス可カラス

第二十九條 登記官自己ノ權利義務ヲ登記ス可キ場合ニ於テハ治安判事及ヒ郡長ハ書記戸
長ハ次席吏員ヲシテ代テ登記ヲ爲サシム可シ

第三章 帳簿

第三十條 登記所使用ノ帳簿ハ左ノ如シ

- 一 地所登記簿
- 二 建物登記簿
- 三 船舶登記簿
- 四 受付帳
- 五 登記見出帳三種

六 印鑑簿 區戸長ノ證明シタル印
鑑ヲ挿入シタルモノ

七 謄本下付帳

八 登記濟證下付帳

九 圖面綴込帳 行政廳ノ登記請求
書ヲ綴込タルモノ

十 請求書綴込帳

十一 登記願書綴込帳 登記法第十五條第二項
ノ書面ヲ綴込タルモノ

十二 證明書綴込帳 登記法第四十條ノ證書及ヒ印
鑑證明書等ヲ綴込タルモノ

十三 名刺綴込帳

十四 代理證書綴込帳

十五 届書綴込帳

第三十一條 登記簿ノ謄本若クハ拔書ヲ請フ者アルキハ其用紙ニ謄寫シ謄本下付帳ト割印
シテ之ヲ下付ス可シ但手數料ヲ領收セサル前ニ謄本又ハ拔書ヲ下付スルヲ得ス

第三十二條 謄本ハ登記簿一用紙ノ全部ヲ遺漏ナク謄寫シテ之ヲ作ル可シ
拔書ハ請求アル部分ノミ登記簿ヨリ摘寫シテ之ヲ作ル可シ

第三十三條

登記簿ノ旨ヲ朱記シ登記簿下付帳ト判印シテ之ヲ下付ス可シ

第三十四條

登記簿ノ旨ヲ朱記シ登記簿下付帳ト判印シテ之ヲ下付ス可シ

依リ登記物件ノ番號ヲ付スル毎ニ各番號ヲ記入スルモノトス

同番號ノ地所ニシテ數筆ニ分レタルモノアルキハ地券面ノ符號ヲ番地ノ下ニ記載ス可ク

同番地ニアル建物ニシテ棟ヲ異ニシタルキハ建物ノ番號ヲ番地ノ下ニ記載シテ之ヲ區別

ス可シ番號若クハ符號ヲ同フスル地所又ハ番地若クハ棟ヲ同フスル建物ヲ分割シテ賣買

讓與質入書入ト爲スルハ其各部ノ地所若クハ建物ニ子丑寅卯ノ符號ヲ付シテ之ヲ區別ス可シ

第三十五條

登記ニ關スル帳簿ハ常ニ書箱ニ藏メ其封緘ヲ嚴ニシ非常持退ノ準備ヲ爲シ勉テ紛亂毀損ヲ豫防ス可シ

第三十六條

登記簿ノ旨ヲ朱記シ登記簿下付帳ト判印シテ之ヲ下付ス可シ

第三十七條

登記簿ノ旨ヲ朱記シ登記簿下付帳ト判印シテ之ヲ下付ス可シ

裁判所ニ送致ス可ク其裁判所ニ於テハ之ヲ取纏メ合計表ヲ付シ其月末マテニ其應テ發シ

司法省ニ差出ス可シ

第四章 登記料手数料及ヒ評價費用

第三十八條

登記料ハ登記ヲ爲ス前之ヲ納メシム可シ登記事件ノ取消若クハ變更ノ登記ヲ請フ者ノ納ム可キ手数料ニ付テモ亦同シ

第三十九條

登記法第三十二條ニ依リ評價ヲ要スル場合ニ於テハ登記所ハ其費用ヲ見積リ登記料ヲ納ムル者ヨリ之ヲ豫納セシム可シ

第四十條

登記所ニ於テハ評價人ヲシテ速ニ物件ノ所在ニ就キ價格ヲ評定シ其評價書ヲ差出サシム可シ

評價人中ノ一名意見ヲ異ニスルキハ他ノ二名ノ意見ニ依リ價格ヲ定ム可ク若シ各自意見

ヲ異ニスルキハ更ニ評價人ヲ選定ス可シ

第四十一條

登記法第三十三條ニ依リ評價ノ費用ヲ本人ニ負擔セシム可キハ豫納金ヲ以テ之ヲ支辨シ殘額アルキハ之ヲ還附ス可ク不足スルキハ之ヲ納完スルマテ登記ヲ爲ス可

カラス

若シ登記所ニ於テ費用ヲ負擔ス可キハ豫納金ノ全額ヲ還附ス可シ

第四章 公證人規則

朕公證人規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
御名 御璽

明治十九年八月十一日

内閣總理大臣 伯爵伊藤博文
司法大臣 伯爵山田顯義

法律第二號

公証人規則

第一章 總則

- 第一條 公証人ハ人民ノ囑托ニ應シ民事ニ關スル公正証書ヲ作ルヲ以テ職務ト爲ス
- 第二條 公証人ハ法律命令ニ背キタル事件ノ公正証書又ハ他ノ官吏ノ作ル可キ公証書類ヲ作ルヲ得ス若シ之ヲ作リタルハ公正ノ効チ有セス
- 第三條 公証人ノ作リタル公正証書ハ完全ノ證據ニシテ其正本ニ依リ裁判所ノ命令ヲ得テ執行スルカアルモノトス但刑事裁判所ニ偽造ノ訴アルハ其証書ノ執行ヲ中止ス可シ又民事裁判所ニ偽造ノ申立アルハ其証書ノ執行ヲ中止ス可シ又
- 第四條 公証人ハ治安裁判所ノ管轄地ヲ以テ受持區トシ其區内ニ於テ司法大臣ノ認可ヲ受ケタル町村内ニ住居シ其居宅ニ役場ヲ設ケ役場ニ於テ職務ヲ行フ可シ但役場外ニ住居セ

- ソトスルハ管轄始審裁判所ノ認可ヲ受ク可シ
己ムヲ得サル事件ニ付テハ受持區内ニ限リ役場外ニ於テ其職務ヲ行フ可シ
- 第五條 各區内公証人ノ員數ハ司法大臣之ヲ定ム
- 第六條 公証人ハ司法大臣ニ隸屬シ控訴院長始審裁判所長ノ監督ヲ受クルモノトス
- 第七條 公証人其受持區内ニ於テハ區外人ノ爲メニモ職務ヲ行フ可シ但受持區外ニ於テハ何人ノ爲メニモ職務ヲ行フヲ得ス若シ之ヲ行ヒタルハ其書類ハ公正ノ効チ有セス
- 第八條 公証人ハ理由ナクシテ人民ノ囑托ヲ拒ムヲ得ス若シ之ヲ拒ミタルハ囑托人ノ求メアレハ其理由ヲ記シテ渡ス可シ
- 第九條 公証人ノ職務執行上ニ關シ不服アル者ハ管轄始審裁判所ニ抗告スルヲ得
- 第十條 公証人ハ公証人何某ト刻シタル方六分ノ役印ヲ作り其印鑑ニ氏名ヲ手書シ之ヲ管轄始審裁判所及治安裁判所ニ差出ス可シ
前項ノ印鑑ヲ差出サ、ル間ハ職務ヲ行フヲ許サス若シ之ヲ行ヒタルハ其書類ハ公正ノ効チ有セス
- 第十一條 公証人已ムヲ得サル事故アリテ職務ヲ行フ不能ハサルハ近隣ノ公証人ニ代理ヲ囑シ管轄始審裁判所ニ其旨ヲ届出可シ
- 第十二條 公証人ハ筆生ヲ置キ書類ヲ作ル補助ヲ爲サシムルヲ得

第十三條 公證人ノ作ル公書及謄本ノ用紙ハ某始審裁判所管内公證人役場ト刻シタル紙ヲ用フ可シ

第十四條 公證人ノ取扱フ可キ書類左ノ如シ

第一 原本 證書ノ本紙ニシテ公證人ノ保存スルモノ

第二 正本 原本ノ全文ヲ記シタルモノニシテ本文義務ノ執行ヲ裁判所ニ願出可キ旨ヲ其末尾ニ前項ト同一ノ記載アルモノ

第三 抄録正本 原本ノ一部分ヲ記シ其末尾ニ前項ト同一ノ記載アルモノ

第四 正式謄本 原本ノ全文ヲ寫シタルモノニシテ原本ニ代ヘ得可キモノ

第五 抄録正式謄本 原本ノ一部分ヲ抄寫シタルモノニシテ原本ニ代ヘ得可キモノ

第六 謄本 原本ノ全文ヲ寫シタルモノ

第七 抄録謄本 原本ノ一部分ヲ抄寫シタルモノ

第八 見出帳 日々授受シタル書類ノ番號種類等ヲ順次ニ記入スルモノ

第十五條 原本其他書類ノ本書ハ役場ニ之ヲ保存シ他ノ官吏ノ公証ヲ受クル爲メノ外裁判所ノ命令ニ依ルニ非サレハ役場外ニ出スヲ得ス

第十六條 裁判所ノ命令ニ依ルノ外關係外ノ者ニ書類ノ謄本ヲ渡ス可カラズ

第十七條 公證人ハ其取扱ヒタル公證事件ヲ漏洩ス可カラズ

第二章 公證人ノ選任及試験

第十八條 公證人タル可キ者ハ左ノ件々ヲ具備スルヲ要ス

第一 滿二十五歳以上ナル事

第二 身元保證金ヲ管轄始審裁判所ニ差入ル、事

第三 定式試験ノ及第證書ヲ有スル事但裁判官檢察官タリシ者及法學士法科大學卒業生

代理人ハ此條件ヲ要セス

第四 丁年者二名以上ニテ其品行ヲ保證スル證書ヲ有スル事

第十九條 保證金ノ額ハ土地ノ狀況ニ從ヒ二百圓以上五百圓以下ニ於テ豫メ司法大臣之ヲ

定ム

第二十條 左ニ掲クハ者ハ公證人タルヲ得ス

第一 公權剝奪若クハ停止中ノ者

第二 盜罪詐偽罪賄賂收受ノ罪及贓物ニ關スル罪ヲ犯シ刑ヲ受ケタル者

第三 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

第四 官吏懲戒令ニ依リ免職セラレタル者

第二十一條 公證人ヲ試験スル場所及期日ハ司法大臣之ヲ定メ少クモ二箇月前ニ告示ス可シ

第二十二條 試驗委員ハ控訴院若シハ始審裁判所ノ裁判官二名檢察官一名トシ司法大臣臨時之ヲ命ス

第二十三條 試驗ノ科目ハ公證人規則民法訴訟法商法其他公證人ノ職務ニ關スル法律命令トス

第二十四條 公證人ヲラント欲スル者ハ願書ニ試驗及第證書ノ寫ヲ添ヘ管轄始審裁判所若シハ控訴院ヲ經テ司法大臣ニ差出ス可シ但裁判官檢察官タリシ者ハ其官記法學士ハ其學位記法科大學卒業生ハ其卒業證書代人ハ其免許狀ヲ以テ及第證書ニ代フルヲ得

第二十五條 公證人ハ司法大臣之ヲ任ス

第二十六條 試驗ノ方法ハ筆記口述ノ二種トス筆記試驗ニ合格セサル者ハ口述試驗ヲ受クルヲ得ス

第二十七條 試驗及第者ニハ及第證書ヲ授與ス

第三章 證書

第一節 證書ノ原本

第二十八條 公證人證書ヲ作ルニハ其囑托人ノ氏名ヲ知り面識アルヲ必要トシ且丁年者一名ノ立會人ヲ要ス之ニ違ヒタルハ其證書ハ公正ノ効チ有セス

公證人囑托人ノ氏名ヲ知ラス面識ナキハ其本籍或ハ寄留地ノ郡區長若シハ戶長ノ證明

書又ハ公證人氏名ヲ知り面識アル丁年者二人以上ヲ以テ其人ヲ證セシム可シ之ニ違ヒタルハ其證書ハ公正ノ効チ有セス

第二十九條 左ニ掲ケル者ハ立會人タルヲ得ス

第一 公證人及囑托人ノ親屬雇人又ハ公證人ノ筆生

第二 第二十條ニ掲ケタル者

第三十條 證書ニハ其本旨ノ外左ノ件々ヲ記載ス可シ

第一 囑托人及立會人ノ族籍住所職業氏名年齢

第二 囑托人代理人ナルハ委任狀ヲ所持シタルヲ及其本人ノ族籍住所職業氏名年齢

第三 囑托人後見人ナルハ後見人タルノ證書ヲ所持シタルヲ及其本人ノ族籍住所職業氏名年齢

第四 郡區長戶長ノ證明書ヲ以テ證シタルハ其旨又證人ヲ要シタルハ其族籍住所職業氏名年齢

第五 證書ヲ作リシ場所及其年月日若シ場所ヲ記セス又ハ年月日ノ記入ヲ遺脱シタルハ其證書ハ公正ノ効チ有セス

第三十一條 證書ヲ作ルニハ普通平易ノ語ヲ用ヒ字畫明瞭ナルヲ要ス
接續ス可キ字行ニ空白アルハ墨線ヲ以テ之ヲ接續ス可シ

數量並ニ年月日ヲ記スルニハ壹貳參肆伍陸柒捌玖拾陌阡萬ノ字ヲ用フ可シ

第三十二條 度量衡貨幣ノ數量名稱及曆法ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ之ヲ記ス可シ

既ニ廢シタル度量衡貨幣曆法又ハ外國ノ度量衡貨幣曆法ヲ記セサルヲ得サル場合ニ於テハ之ヲ用フルヲ得

第三十三條 證書追加改正ヲ爲スルハ其文字並ニ何行ニ追加改正ヲ爲シタルヲ欄外又ハ

末尾ノ餘白ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ又文中消字ヲ爲スルハ其原字ノ尙ホ明カニ讀得可キヲ要ス且何行ニ若干字ヲ消シタルヲ欄外又ハ末尾ノ餘白ニ附記シ公證

人並ニ關係人捺印ス可シ之ニ違ヒタルハ追加改正消字ノ効チ有セズ

第三十四條 證書ヲ作リタルハ關係人ニ讀ミ聞セ其旨ヲ記入シ然ル後ニ公證人並ニ關係

人各自署名捺印シ公證人ハ某治安裁判所管内某地住居ト肩書ス可シ

公證人並ニ關係人ノ署名捺印ナキハ其證書ハ公正ノ効チ有セズ

若シ署名スル能ハサルハ明治十年第五十號ノ布告ニ從フ可シ之ニ違ヒタルハ其證書ハ公正ノ効チ有セズ

第三十五條 證書ノ綴目合目ニハ公證人並ニ囑托人之ニ捺印ス可シ

第三十六條 公證人ハ自己及親屬ノ爲メニ證書ヲ作ルヲ得ス其親屬他人ノ代理人タルハ

モ亦同シ之ニ違ヒタルハ其證書ハ公正ノ効チ有セズ

第三十七條 公證人若シ囑託人ノ爲メ訴訟代人若シハ代言人ト爲リ又ハ爲リタルヲアルハ其訴訟事件ニ付キ證書ヲ作ルヲ得ス之ニ違ヒタルハ其證書ハ公正ノ効チ有セズ

第三十八條 公證人ハ自己親屬立會人又ハ證人ノ爲メニ利益アル條件ヲ證書中ニ記ス可カラス若シ之ヲ記シタルハ其條件ハ無効トス

第三十九條 公証人ハ証書ノ原本ヲ保存ス可シ若シ之ヲ保存セズ又ハ亡失シタル場合ニ於テ第四十七條ノ手續ヲ爲サルハ其証書ハ公正ノ効チ有セズ

第四十條 囑託人若シ代理人又ハ後見人ナルハ其委任狀又ハ其証書ノ寫ヲ原本ニ連續ス可シ其寫ニハ本書ト對照シ相違ナキ旨ヲ附記シ公証人並ニ關係人署名捺印シ其寫ト本書トニ割印ス可シ

第四十一條 證書ニ關係ノ書類ハ之ヲ原本ニ連續スルヲ得之ヲ連續シタルハ其旨ヲ原本ノ欄外又ハ末尾ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ

第四十二條 原本ニハ證券印稅規則ニ定メタル印紙ヲ貼用ス可シ

第二節 正本及謄本

第四十三條 正本ハ數量ノ定リタル金錢其他換用物若シハ有價證券ノ支辨ニ限リ權利者ノ

請求ニ依リ之ヲ渡ス可シ之ニ違ヒタルハ正本ノ効チ有セズ

正式謄本及抄録正式謄本ハ權利者ノ請求ニ依リ之ヲ渡ス可シ

第四十四條 正本又ハ正式謄本ハ原本ト同時ニ又ハ原本ヲ作リタル後ニ於テ之ヲ作ルコトヲ得原本ト同時ニ作ルキハ關係人ノ面前ニ於テシ原本ヲ作リタル後ニ作ルキハ更ニ義務者ノ立會ヲ以テス可シ義務者出席セサルキハ正本又ハ正式謄本ヲ求ムル者ヨリ管轄始審裁判所ニ出願シ其命令ニ依テ他ノ公證人一員又ハ裁判所ノ裁判官檢察官又ハ書記一員ノ立會ヲ以テ之ヲ作ル可シ之ニ違ヒタルキハ其効チ有セズ

裁判所ノ命令ニ依テ正本又ハ正式謄本ヲ作リタルキハ其末尾并ニ原本ノ末尾ニ其旨ヲ附記シ其命令書ハ之ヲ原本ニ連綴ス可シ

第四十五條 正本又ハ正式謄本ヲ作ルキハ第三十一條第三十三條第三十四條第三項及第三十五條ノ規定ニ依ル可シ

正本又ハ正式謄本ニハ權利者ノ氏名並ニ之ヲ作リタル年月日及場所ヲ記シ公証人並ニ義務者署名捺印ス可シ前條第一項ノ場合ニ於テハ公証人及他ノ公証人又ハ裁判所ノ官吏署名捺印ス可シ之ニ違ヒタルキハ其効チ有セズ

第四十六條 正本又ハ正式謄本ヲ渡シタルキハ原本ノ末尾ニ其旨ト年月日トヲ附記シ權利者ヲシテ署名捺印セシム可シ

第四十七條 正本又ハ正式謄本ハ原本ノ亡失シタルキハ管轄始審裁判所ノ認可ヲ經之ヲ原本トシテ保存ス可シ

第四十八條 數事件列記シ數人各自ニ關係チ異ニスル証書ハ權利者ノ請求ニ依リ其有用ノ又抄部分ヲ抄録シテ正本又ハ正式謄本ヲ作ルコトヲ得

正本又ハ正式謄本ヲ渡シタル者ニハ更ニ抄録正本又ハ抄録正式謄本ヲ渡ス可カラズ錄正本又ハ抄録正式謄本ヲ渡シタル者ニハ更ニ正本又ハ正式謄本ヲ渡ス可カラズ之ヲ渡スト雖モ其効チ有セズ

第四十九條 正本又ハ正式謄本ハ管轄始審裁判所ノ命令アルニ非サレハ再度之ヲ渡スコトヲ得ズ之ヲ渡スト雖モ其効チ有セズ

再度以上正本又ハ正式謄本ヲ得ント欲スル者ハ其事由ヲ具シテ管轄始審裁判所ニ願出ツ可シ管轄始審裁判所ハ原本ヲ保存スル公証人ニ其正本又ハ正式謄本ヲ渡ス可キコトヲ命ズルコトアル可シ

其正本又ハ正式謄本ニハ幾度ノ正本又ハ正式謄本ナルコトヲ末尾ニ附記シ公証人署名捺印ス可シ之ニ違ヒタルキハ其効チ有セズ

第五十條 抄録正本又ハ抄録正式謄本ハ總テ正本又ハ正式謄本ト同一ノ手續ニ依リ之ヲ作ル可シ其効力モ亦同シ

第五十一條 證書ノ謄本及其附屬書類ノ寫ハ關係人ノ求メニ應シ之ヲ渡ス可シ

第五十二條 謄本ニハ原本ノ全文ヲ寫シ其末尾ニ謄本ト記シ公証人署名捺印ス可シ

第五十三條 抄錄謄本ニハ原本ノ年月日及囑託人ノ族籍住所職業氏名ヲ記シ末尾ニ抄錄謄本ト記シ公証人署名捺印ス可シ

第五十四條 管轄始審裁判所ノ命令ニ依リ關係外ノ者ニ謄本ヲ渡シタルハ其命令書ヲ原本ニ連續シ末尾ニ命令書ヲ受ケタル旨并ニ年月日ヲ附記シ愛取人ヲシテ署名捺印セシム可シ

節三節 見出帳

第五十五條 公証人ハ見出帳ヲ作り記入前管轄始審裁判所ニ差出シ綴目合目ニ其所長ノ官印ヲ受ク可シ

第五十六條 見出帳ニハ日々取扱ヒタル書類中ヨリ第三十一條及第三十三條ノ規定ニ從ヒ左ノ件々ヲ記入ス可シ

第一 囑託人ノ住所氏名

第二 書類ノ番號種類

第三 書類ヲ取扱ヒタル年月日

第四節 兼任及書類ノ授受

第五十七條 公証人死去失踪免職辭職轉職又ハ他ノ役場ニ轉シテ直ニ後任者ノ命セラレサル場合又ハ辭職又ハ停職ノ場合ニ於テハ管轄始審裁判所ハ近隣ノ公証人ニ命シテ其事務

ヲ兼任セシムベシ

役場ヲ廢シタルハ書類ノ引繼ヲ近隣ノ公証人ニ命スベシ

第五十八條 前條ノ場合ニ於テ兼任者ナキハ其他必要ト見認ムル場合ニ於テハ管轄始審裁判所ハ直ニ其役場ノ書類ニ封印ヲ爲スベシ

第五十九條 公証人免職辭職又ハ他ノ役場ニ轉シタル場合ニ於テハ後任者又ハ兼任者ハ前任者ト立會ヒ書類ノ提要目錄ヲ作り共ニ署名捺印シテ授受スベシ

死去失踪其他ノ事故ニ因リ引渡人ナキ場合ニ於テハ後任者又ハ兼任者ハ管轄始審裁判所ノ官吏ト立會ヒ提要目錄ヲ作り受取ルベシ

書類封印後ニ命セラレタル後任者又ハ兼任者ハ管轄始審裁判所ノ官吏ト立會ヒ封印ヲ解キ提要目錄ヲ作り受取ル可シ

後任者又ハ兼任者ハ提要目錄ヲ作りタル日ヨリ一月以内ニ其目錄ノ寫一通ヲ管轄始審裁判所ニ差出ス可シ

第六十條 公証人停職ノ場合ニ於テハ兼任者ハ第五十九條ノ手續ヲ爲スニ及ハス書類ノ保存ハ停職者之ヲ擔當ス可シ

兼任者ハ停職者ノ役場ニ於テ其職務ヲ行フベシ

第六十一條 兼任者引繼ノ書類ヲ更ニ他ノ公証人ニ引渡ストキハ其命ヲ受ケタル日ヨリ三

日以内ニ自己ノ引繼キタル時ノ目錄ニ依テ引渡ヲ爲シ其始末書ヲ作り受繼人ト共ニ署名捺印スベシ

受繼人ハ始末書ヲ作りタル日ヨリ一月以内ニ其寫一通ヲ作り管轄始審裁判所ニ差出スベシ

第六十二條 停職者復任スルキハ管轄始審裁判所ヨリ兼任者ニ解任ヲ命ス可シ

第六十三條 前任者ノ作りタル原本ニ依テ後任者正本又ハ謄本ヲ渡スキハ其受繼人タル旨ヲ附記ス可シ

本任者ノ作りタル原本ニ依テ兼任者正本又ハ謄本ヲ渡スキハ兼任者タル旨ヲ附記ス可シ

第四章 手數料及旅費日當

第六十四條 公証人ハ此章ニ定メタル程限ニ從ヒ囑託人ヨリ手數料及旅費日當ヲ受クルヲ得

第六十五條 手數料ハ原本一枚ニ付キ貳拾五錢正本及謄本ハ一枚ニ付キ拾錢但一行二十字二十行ヲ以テ一枚トシ十行以上ハ一枚十行以下ハ半枚ヲ以テ算ス

第六十六條 囑託人ノ求メニ依リ先ツ証書ノ草案ヲ渡シ後其原本ヲ作りタルキハ草案ノ手數料ヲ別ニ請求スルヲ得ス但其原本ヲ作ラサルトキハ原本手數料ノ半額ヲ受クルヲ得

第六十七條 公証人其役場ヨリ一里以外ノ地ニ往テ職務ヲ行フトキハ往返トモ旅費トシテ

一里毎ニ貳拾錢ヲ受クルヲ得其職務ヲ行フ爲メ或ハ災變ノ爲メニ其場所又ハ途中ニ滯留スルトキハ日當七拾錢ヲ受クルヲ得

第六十八條 兼任者本任者ニ代リテ其職務ヲ行フトキハ其手數料ハ總テ後任者之ヲ受ク可シ

第六十九條 手數料ノ外証券印紙並ニ罫紙ノ代價ハ囑託人ヨリ之ヲ受クルヲ得

第七十條 囑託人ノ求メアルトキハ手數料等ノ計算書ヲ與フベシ

第七十一條 手數料等ニ係リ争ヒノ生シタルトキハ其金額ニ拘ハラヌ管轄始審裁判所ニ訴フベシ

第五章 懲罰

第七十二條 公証人此規則ヲ犯シタル時ハ管轄始審裁判所ニ於テ第七十三條ヨリ第七十六條マテニ定メタル規定ニ依リ處分スベシ

第七十三條 左ノ違犯ハ五拾錢以上壹圓九十五錢以下ノ過料ニ處ス

第八條ニ違ヒタル時

第十一條ニ違ヒタル時

第十三條ニ違ヒタル時

第二十條ノ第一第二第三第四ノ規定ニ違ヒタル時
第三十一條ノ第二項又ハ第三項ニ違ヒタル時

第三十四條ノ第一項ニ違ヒ讀聞セシヲテ記入セス又ハ肩書ヲ爲サ、リシ時

第三十五條ニ違ヒタル時

第四十條ニ違ヒタル時

第四十一條ニ違ヒタル時

第四十二條ニ違ヒタル時

第四十四條ノ第二項ニ違ヒタル時

第四十六條ニ違ヒタル時

第五十二條ニ違ヒタル時

第五十三條ニ違ヒタル時

第五十四條ニ違ヒタル時

第五十五條ニ違ヒタル時

第五十九條ノ第四項ニ違ヒタル時

第六十一條ニ違ヒタル時

第六十三條ニ違ヒタル時

第七十四條左ノ違犯ハ貳圓以上五圓以下ノ過料ニ處ス

第四十三條ニ違ヒタル時

第四十四條ノ第一項ニ違ヒタル時

第四十五條ノ第二項ニ違ヒタル時

第四十八條ノ第二項ニ違ヒタル時

第四十九條ノ第一項又ハ第三項ニ違ヒタル時

第七十五條 左ノ違犯ハ五圓以上三拾圓以下ノ過料ニ處ス

第二條ニ違ヒタル時

第七條ニ違ヒタル時

第十條ノ第二項ニ違ヒタル時

第二十八條ニ違ヒタル時

第三十條ノ第五ノ規定ニ違ヒタル時

第三十三條ニ違ヒタル時

第三十四條ノ第二項又ハ第三項ニ違ヒタル時

第三十六條ニ違ヒタル時

第三十七條ニ違ヒタル時

第三十八條ニ違ヒタル時

第三十九條ニ違ヒタル時

第七十六條 左ノ違犯ハ一月以上四月以下ノ停職ニ處ス

第四條ノ第一項ニ違ヒタル時

第十五條ニ違ヒタル時

第十六條ニ違ヒタル時

第十七條ニ違ヒタル時

第七十七條 公証人前數條ニ掲ケタル懲罰處分ニ對シ不服アルトキハ管轄控訴院ニ抗告スルヲ得但抗告ハ其處分ノ執行ヲ停止スルノ効力ナキモノトス

第七十八條 公証人停職ニ當ル所爲三度ニ及ヒタルトキハ司法大臣其職ヲ免ス

第二十條ノ第一第二第二ニ記載シタル處分ヲ受ケ又ハ身元保證金ヲ差入レサルトキ亦前項ニ同シ

第七十九條 公証人此規則ヲ犯シタルニ依リ他人ニ損害ヲ生セシメタルトキハ之ヲ賠償ス可シ

第五章 公証人規則施行條例

○司法省令甲第二號 明治十九年八月三十日

今般法律第二號ヲ以テ公証人規則制定相成候ニ付施行條例左ノ通之ヲ定ム

公証人規則施行條例

第一條 公証人ハ一受持區ニ五名以下ヲ置クモノトス若シ公証人ノ員數不足スルキハ受持區ニ依リテハ全ク之ヲ置カザルコトアルベシ

第二條 公証人ハ其受持區内ニ於テ住居セント欲スル町村ヲ定メ其願書ヲ始審裁判所ニ差出シ控訴院ヲ經テ司法大臣ノ認可ヲ請フベシ

始審裁判所長及控訴院長ハ公証人ヨリ差出タル住居願ニ意見ヲ附シテ之ヲ司法大臣ニ送達ス可シ

司法大臣ニ於テ公証人ヨリ願出タル住居ヲ認可セザルトキハ直チニ其住居ス可キ町村ヲ指定ス

第三條 公証人既ニ住居ノ認可ヲ受タル後火災其他ノ事故アリテ他ニ轉居セントスルトキモ亦前條ノ手續ニ從フ可シ

第四條 公証人ノ役場ニハ公証人某役場ト記セル表札ヲ掲グ可シ
役場ニハ成可ク倉庫又ハ堅牢ナル建物ヲ以テ書類保存ノ所ト爲スヲ要ス

書類ハ常ニ書籍ニ藏メ非常持退ノ準備ヲ爲シ置ク可シ

第五條 公證人規則ニ從ヒ試験ヲ受ケント欲スル者ハ試験願書ニ履歷書ヲ添ヘ試験期日ノ告示アリタルヨリ試験期日一箇月前マテニ試験ヲ行フ控訴院若クハ始審裁判所ニ差出スベシ

試験願書及履歷書ニハ本籍區長 シハ戶長ノ與書ヲ受クベシ
第六條 試験ハ各所同時ニ之ヲ行フモノトス

第七條 試験委員ハ筆記試験ノ答案ヲ調査シ其合格不合格ヲ決定シタル後口述試験ヲ行フベシ

筆記試験ニ合格セサル者ニ付テハ口述試験ヲ行ハズ

第八條 試験問題答案ノ適否ハ試験委員ノ判斷ニ決スルモノトス

試験ノ結果ハ筆記口述二種ノ總點ニ依リ之ヲ定ムベシ

第九條 試験委員ハ口述試験ノ大畧及試験全體ノ結果ヲ記録ニ記載ス可シ

第十條 試験ニ及第シタル者ニハ試験委員ノ連署シタル及第證書ヲ授與スベシ

試験ヲ行フタル控訴院若クハ始審裁判所ハ試験及第人名簿ヲ製シ之ニ及第者ノ住所族籍氏名年齢及第ノ年月日ヲ登錄スベシ

第十一條 試験委員ハ試ニ關スル一切ノ書類ヲ其試験ヲ行フタル始審裁判所若クハ控訴院ノ長ニ差出スベシ

始審裁判所ニ於テ試験ヲ行フタルキハ其裁判所長ハ及第者ニ關スル一切ノ書類ニ意見ヲ附シテ控訴院ニ送致シ控訴院長モ亦意見ヲ附シテ司法大臣ニ差出ス可シ
控訴院ニ於テ試験ヲ行フタルキハ前項ノ書類ニ控訴院長ノ意見ヲ附シテ司法大臣ニ差出ス可シ

第十二條 公証人ヲラント欲スル者ハ其願書ニ試験及第證書官記學位記卒業證書又ハ免許狀ノ寫及丁年者二名以上ニテ品行ヲ保証スル証書ヲ添ヘ之ヲ差出ス可シ
試験及第證書ヲ要セザル出願人ハ別ニ履歷書ヲ添フ可シ

第十三條 公証人願ヲ受タル始審裁判所ノ裁判所長及上席檢事ハ出願人ノ身上ニ付品行ノ正否理財ノ整否等詳細ノ取調ヲ爲シ控訴院ニ送致シ控訴院長及檢事長モ亦意見ヲ附シテ之ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

第十四條 公証人願書ヲ直チニ控訴院ニ差出タルキハ控訴院長及檢事長ハ前條ノ取調ヲ爲シ且ツ意見ヲ附シ之ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

第十五條 公証人願書ニハ其職務ヲ行ハント欲スル地ヲ明記ス可シ

第十六條 司法大臣公証人ヲ任ズルキハ辞令書ヲ其公証人ノ職務ヲ行フ可キ地ノ管轄控訴院及始審裁判所ヲ經テ本人ニ下付ス

控訴院及始審裁判所ニ於テハ公證人名簿ヲ備置キ公證人ニ任セラレタル者ノ住所族籍氏

名年齢及任地ヲ記録ス可シ

第十七條 公証人ニ任セラレタル者ハ身元保證金トシテ現金又ハ相當ノ價格アル公債證書若シハ日本銀行株券ヲ管轄始審裁判所ニ納ム可シ

第十八條 公証人ノ納ム可キ身元保證金ノ額ハ左ノ如シ

東京及大坂 金五百圓

他ノ地方ニ於テハ 金四百圓

人口貳拾萬以上アル受持區 金三百圓

人口十萬未滿アル受持區 金貳百圓

前項ノ金額ハ人口ニ増減アリト雖モ既ニ完納シタルモノハ之ヲ増減セズ

第十九條 公証人ハ身元保證金ヲ管轄始審裁判所ニ完納セサル間ハ其職務ヲ行フヲ得ス

公証人任命ノ辞令書ヲ受取タルヨリ三十日以内ニ身元保證金ヲ完納セサルハ公証人規則第七十八條第二項ニ依リ司法大臣其職ヲ免ス

第二十條 公証人ノ身元保證金ハ公証人規則第五章ニ定メアル過料其他賠償ノ抵保ニ充ツルモノトス

第二十一條 過料賠償其他ノ事故ニ依リ身元保證金ノ全部又ハ一部ヲ減消シタルハ管轄

始審裁判所長ハ速ニ保證金ヲ補充ス可キ旨ヲ公証人ニ命ス可シ

公証人保證金ヲ補充スルマテ始審裁判所長ハ假ニ職務執行ノ停止ヲ命スルヲ得此場合ニ於テニ速ニ其旨ヲ司法大臣ニ具申ス可シ

公証人保證金補充ノ命令ヲ受ケ六十日ヲ過キ之ヲ補充セサルトキハ始審裁判所長ハ控訴院ヲ經テ司法大臣ニ具申シ免職ノ處分ヲ請フ可シ

第二十二條 公証人他ノ役場ニ轉スル場合ニ於テ其保證金ニ不足ヲ生スレハ之ヲ補充セシメ若シ餘分アレハ之ヲ還付ス可シ

第二十三條 公証人其職務ヲ罷メタルトキハ身元保證金ヲ還付ス可シ

第二十四條 公証人死去失踪シ又ハ停職ノ處分ヲ受ケタルトキハ管轄始審裁判所ハ控訴院ヲ經由シ其旨ヲ司法大臣ニ具申ス可シ

停職者復任シタルハ亦前項ノ手續ニ從フ可シ

第二十五條 公証人死去失踪停職復任辞職免職又ハ轉職シタルハ始審裁判所及控訴院ハ其旨ヲ公証人名簿ニ記入ス可シ

第二十六條 公証人規則ニ定メアル懲罰處分ハ民事裁判所之ヲ管轄シ刑法及治罪法ノ例ヲ用ヒス

第二十七條 公証人試験願書式履歷書式及公証人願書式ハ左ノ如シ

第一 公証人試驗願書式

公証人試驗願 料紙美濃紙

族籍 戶主嗣子又ハ二
三男兄弟ノ別

氏 名

年 齡

現住所

氏 名 印

私儀公証人試驗相受度此段奉願候也

年月日

其控訴院長誰殿 又ハ某始審裁判所長誰殿

前書ノ通族籍年齡等相違無之候也

本籍

區長又ハ戶長印

第二 履歷書式

履歷書 料紙美濃紙

族籍

氏 名

年 齡

一 何年何月ヨリ何年何月迄 府 縣 何某ニ就キ又ハ公私何學校何塾ニ於テ何學修業

一 何年何月何々ニ關スル一切ノ件 職業仕官進退賞罰等

一 公証人規則第二十條ノ各項ニ相觸候儀一切無之候

氏 名 印

前書ノ通相違無之候也

本籍

區長又ハ戶長印

年月日

第三 公証人願書式

公証人願 料紙美濃紙

族籍 戶主嗣子又ハ二
三男兄弟ノ別

氏 名

年 齡

私儀何府何國某治安裁判所管下公証人受持區ニ於テ公証人ノ職務ヲ行ヒ度志願ニ有
之候ニ付御登用被下度試驗及第證書〔官記學位記卒業證書免許狀〕ノ寫及ヒ品行保
證書相添此段奉願候也

現住所

年月日

司法大臣謹殿

又

私儀何府何國某治安裁判所管下及何縣何國某治安裁判所管下〔某始審裁判所管下又ハ某控訴院管下〕ノ内何レノ公證人受持區ニ於テナリテ御命令ニ從ヒ公證人ノ職務ヲ行ヒ度志願ニ有之候ニ付御登用被下度試験及第証書〔官記學位記卒業証書免許狀〕ノ寫及ヒ品行保證書相添此段奉願候也

前後ノ式ハ

前式ニ同シ

第六章 抗告手續

○司法省令甲第三號 明治十九年十一月九日

今般法律第一號第二號ヲ以テ登記法及ヒ公證人規則制定相成候ニ付其抗告手續左ノ通之ヲ定ム

抗告手續

第一條 登記官吏又ハ公證人ノ職務執行ニ關シ抗告ヲ爲ス者ハ抗告狀ヲ其登記官吏又ハ公證人ニ差出ス可シ

第二條 登記官吏又ハ公證人抗告狀ヲ受取リタルキハ其翌日ヨリ三日以内ニ意見ヲ附シ且

ツ關係書類ノ寫ヲ添ヘ抗告狀ヲ管轄始審裁判所ニ送致ス可シ

第三條 登記官吏又ハ公證人若シ前後ノ期限内ニ抗告狀ヲ管轄始審裁判所ニ送致セサルキ

又ハ急速ヲ要スル場合ニ於テハ抗告者ハ直チニ管轄始審裁判所ニ抗告狀ヲ差出スコトヲ得

始審裁判所ハ抗告ヲ受ケタル登記官吏又ハ公證人ヲシテ意見書ヲ差出サシメ及ヒ關係書類ヲ求ムルヲ得

第四條 登記官吏又ハ公證人ハ其職務執行上ニ關シ抗告ヲ受タルキハ其處分ヲ停止ス可シ

第五條 抗告狀ヲ受取タル管轄始審裁判所ハ書面ニ依リ判定ヲ爲ス可シ

始審裁判所ハ必要ナリト認ムル場合ニ於テハ抗告者其他關係人ニ書面ヲ以テ答辨セシムルヲ得

第六條 始審裁判所ハ抗告ノ判定書ヲ管轄治安裁判所ニ送致シ之ヲ登記官吏又ハ公證人及ヒ抗告者ニ送附セシム可シ

始審裁判所ニ於テ抗告ヲ正當ナリト判定シタルキハ登記官吏又ハ公證人ハ其判定ニ依ル處分ヲ更正ス可シ

第七條 公證人懲罰處分ニ對シ不服アル者ハ其處分ノ翌日ヨリ起算シ七日内ニ其處分

シタル管轄始審裁判所ニ抗告狀ヲ差出ス可シ

裁判所ハ其抗告ヲ正當ナリト認ムルトキハ速ニ其不服ノ点ヲ更正ス可シ若シ之ヲ正當ト
ラスト認ムルトキハ第二條ノ期日内ニ意見ヲ附シ關係書類ヲ添へ抗告狀ヲ管轄控訴院ニ
送致ス可シ

第八條 公証人懲罰處分ニ對スル抗告ニ付テモ亦第三條ノ手續ニ依ルヲ得

第九條 公證人懲罰處分ニ對スル抗告狀ヲ受取タル控訴院ハ第五條ノ手續ニ從ヒ判定ヲ爲
ス可シ

第十條 控訴院ハ其判定書ヲ處分ヲ爲シタル始審裁判所ニ送致シ之ヲ言渡サシム可シ

控訴院ニ於テ抗告ヲ正當ナリト判定シタルキハ處分ヲ爲シタル始審裁判所ハ其判定ニ依
リ處分ヲ更正ス可シ

第十一條 抗告ノ判定ニ對シテハ總テ上訴ヲ爲スヲ得サルモノトス

版權所有

明治二十一年九月三日印刷
同 年九月六日出版

價金二十錢

編輯者

宮城縣士族 中目孝太郎

發行者

千葉縣平民 磯谷郡爾
東京府本郷區眞砂町三十七番地

印刷者

日本法律社 新潟縣平民 廣川喜久治
東京府京橋區南傳馬町三丁目六番地

發賣所

松成堂 松成伊三郎
東京府京橋區南傳馬町三丁目六番地

同

千葉縣立眞會社 東京支店
東京府京橋區銀坐二丁目十四番地

賣

捌

書

肆

東京大傳馬町二丁目

同日本橋區通四丁目

同本町三丁目

同橫山町三丁目

大坂北久太郎町

上洲高崎田町

同沼田中町

信洲小諸町

信洲白田町

同 長野

同 諏訪

同 同

橫濱元町二丁目

橫濱吉田町

同野毛町

同伊勢崎町

佐藤乙三郎

春陽堂

中外堂

辻岡屋

柳原喜兵工

角田貞吉

塚田屋佐太郎

小山佐傳次

依田儀三郎

西澤喜太郎

宮坂吉左工門

日新堂書房

高橋安五郎

鶴聲社國太郎

佐野屋富太郎

里太亭太郎

同伊勢崎町

上總東金

福島通八丁目

相州平塚

甲府柳町四丁目

房州貝渚

倉田屋太一郎

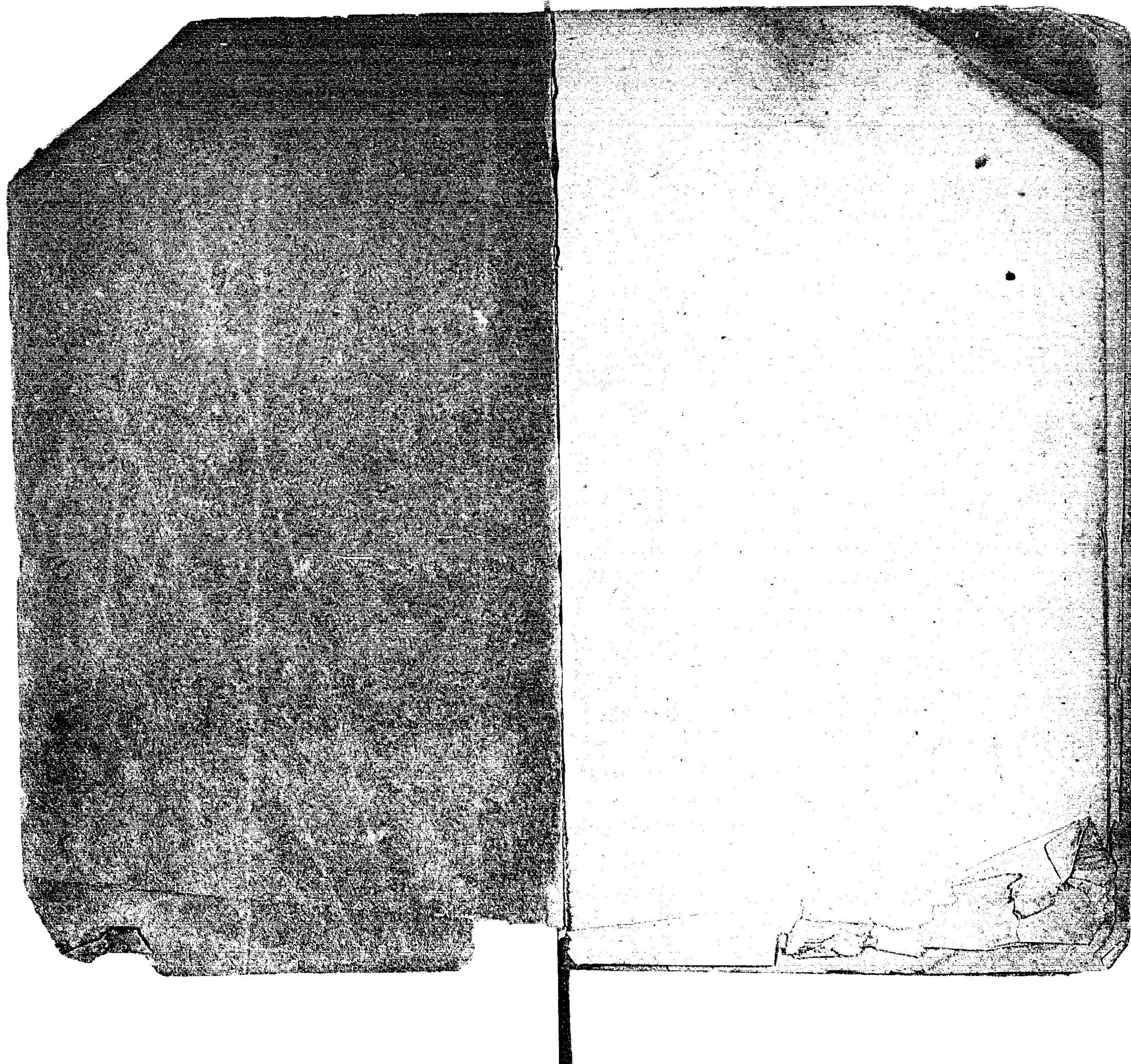
多田屋書店

博向堂

今井政兵工

柳正堂

磯谷書籍店



國立中央圖書館
五
一
五
六
冊 號 架 函